

執著することがいかに我々を不自由ならしめるかをしみて感ぜざるを得ない。しかも廣大な慈悲の心はます／＼我々の生を自由にし、眞理を愛する情熱はます／＼我々の心は無礙ならしめる。こゝに我々が無頓著でなければならぬものの限界がある様である。少なくとも我々は、生そのものに對してまで無頓著である必要はない。またあることも出来ない。さうしてこの生から出て來る幾何かの徳操が、我々を一層自由な境界に導き入れるために、恐らくは絶對者から與へられた戒律として我々の頓著すべきもの及び無頓著であるべきものを定めてゐる。——こゝに總ての宗教が人間の道徳的生活と密接に相接觸する點を生するのである。さうして同時に倫理的な種々の煩悶や論争を引き起すのである。（例へば人間的愛と神的愛との葛藤、無抵抗主義の是非など。）しかしこの點には今深く立ち入るまい。たゞ右の如き戒律が、本來は自己の生のうちからのツびきならぬ命令として湧き出でて來るものだ、といふことを云つて置くに留めよう。

——信仰の内容は正しく相對の内に示現する絶對である。自己の内に生かされた神である。一個の生として働く生その者である。それはたゞ、相對的なる總てのものに無頓著となり、我見を離れ、自他の差別を絶し、一切を含む所の虚空を心中に把握する時、我々の内に突如として體得せられるものである。

一〇

信仰がかくの如き内容を持つとすれば、信仰によつて自己の生が嘘のやうに強められるのも決して不思議はない。

私は再び不遜を敢てして、基督の例をこゝに引かう。試みに基督の福音を眼外に置いてたゞ彼の信仰のみを觀察して見る。年三十まで郷黨の注目をさへ引かなかつた貧しい大工の子耶蘇は、一度自己の内に神を感ずると共に、（即ち宇宙の生としての自己の自信を獲得すると共に、）忽ち烈火のやうな生の高揚を以て猶太人のたゞ中に躍り出た。彼の生は人間の昇り得る最高の力と強さとにまで昇つた。神に於て

總てが可能であるといふ信仰は、神の子としての彼にも亦總てが可能であるといふ自信であつた。——（かくの如き力と自信とは曾ていかなる人間にも起らなかつたのである。）

元來人間の直覺の力は、遲疑すると共にかき亂され、生が強まると共に鋭くされる。直覺によつて動くためには、必ず旺盛な自信が必要である。耶蘇は特に鋭い直覺の持主であつた。さうしてその直覺に動くに何の遲疑する所もなかつた。それが先づ當時の民衆の鈍い知刀を壓倒した。彼は忽ち神通力を有する神の使として民衆の驚異の的となつた。期せずして民衆の心は彼から奇蹟を期待した。奇蹟を疑ふ者の心にさへも既に奇蹟を信じようとする準備があつた。かくして民衆の人格は彼の力に征服され、彼の力は造物主の手の如くに民衆に働いた。實際彼は人間以上の力を現はし得たのである。我々に残された記録の示す通り、當時の民衆がそれを人間業として受取らなかつたのは何の不思議でもない。彼の自信がそれだけの力を生み

出したのは極めて當然である。

自信の力強さが引起した更に驚くべきことは、彼の態度全體に現はれた神の如き權威であつた。みすばらしい大工の子耶蘇は、王の如くに猶太の民衆を跪かせたのである。さうして彼の口から出る一言一句は、不思議な穿通力を以て民衆の胸を貫き、不思議な重さを以て民衆の胸を壓した。權力ある政治家も衆望を擔ふ學者も、この乞食のやうな青年を憚らないではゐられなかつた。

耶蘇自身もその自信の故に恐るゝ事を知らなかつた。彼は何ら冒險的な心持になることなくして彼を殺さうとする人の群に近づきその中を通り抜けた。猶太人の憤怒を豫期しつゝ、その習慣を破り罵つた。騷擾罪にも問はるべき暴行を敢てした。しかも彼の自信ある平然たる態度は、總て彼に敵意を持つ人の力を壓服し去勢した。かくて乞食のやうな一青年は荒野の獅子の如くに猶太中を横行したのであつた。

更に驚くべきは自己の仕事に就ての彼の確信である。「人類は自分によつて救済

せられる。自分の死刑さへもその救済の象徴である。「この事を彼は自分に最も近い使徒たちすらなほ十分自分を理解し得ない時に、些さかの遲疑もなく信じてゐた。神より遣はされた獨子の使命として自己の仕事を信する彼にとつては、目前にその仕事の效果の現はれない事などは、本當に何でもなかつた。しかしそれを、遠くない過去に於て單に田舎大工の息子に過ぎなかつた一青年の上につた事として考へれば、たゞ／＼信仰の偉大な力に驚嘆する他はない。

基督に就てのこの様な見方はまことに冒瀆であるかも知れない。しかし私は基督の福音に大きい意義を認めると共にまた彼の信じかたに意義を認めるのも決して無駄ではないと信じてゐる。場合によつては基督を信するよりも基督自身の信じかたを信する方が、より意義深いかも知れないと思ふ。

一一

自信によつて生を強めることは、自信を右の如き意に解する時、當然我々の望ま

なければならぬ一大事である。自信を缺く時、人は周圍に動かされ 自らの生を散亂せしめる。自信なくして眞理を追ふ者は、たゞ先人の書を獵つて概念を得るに過ぎない。自信なくして藝術を造るものは、たゞ模倣と阿諛に流れる。これ憐れむべき生の枯渴である。たゞ自己の内にあるものを信せよ。内より出でないものには何らの生命もない。もし我々が何事かをなし得るとすれば、それは必ず内より生み出すのである。我々は我々の内にひそむものを、信することによつて育てなければならぬ。

我々の「生」は我々の寶である。それは理知の測り知らない深さと豊かさとを持つてゐる。我々は理知の考量によつて輕々しく自己の生を判じてはいけない。我々は自己の生がどうなるか、何を生むか、總て無知である。しかし我々は、信することによつてそれを強め得ると知つてゐる。信する者の前には山さへも動くのだ。何事を起し得るかは豫想の限りでない。

一三

或才能に對する自信、自分が幸福になるだらうといふ如き自己の運命への信仰、などは自信である點に於て變りはないが、根柢は甚だ淺いやうに見える。多くの場合、それを裏切る實證によつて打ち碎かれ或はそれを證明する事實によつて過度に膨れる。もしくは安價な満足によつて永久にその場に生を凝滞させる。

さうでない場合には、恐らく自己の生に對する信仰にまで深められてゐるのだから。

一三

私は自分に許されてゐないことまでも云つたやうである。しかしそれは致方がない。元來私にはまだ信仰を口にする資格はないのだから。

私はたゞ一つのことを云ひたかつた。さうして云ひ得たと思ふ。——信仰といふ心の態度が、我々の常識の考へるよりも遙かに強く、我々の生を強めるものであることを。

二 世間の評判

二

われは天より降りし生命のパンなり。われに就^{きた}るものは餓ゑず。われを信するものはつねに渴くことなし。——これが彼の言葉であつた。蔑まれた處女の子、卑しい大工の家族、三十まで無爲に暮らした下流社會の一賤民、金なく權力なき「彼」の言葉であつた。

世人は彼を狂人視した。神を瀆すものとして教養あり名譽ある社會から閉め出した。彼の交はる所はたゞ罪人、税吏、癩病人、或は狂人である。彼に従ふものはただ地位なき下層社會の勞働者である。かうして彼は士君子の指彈の的となつた。彼に近づくことは、彼らの「體面」を汚すほどの不名譽であつた。

二

聰明なる者思慮ある者の言葉。

「あの男もまだ若いから、一體に云ふことが誇張されてゐる。おれは神だなどといふのもその類だ。しかし何處か人と變つたい、天分があるやうだ。或は天才といふやうなものかも知れない。評判の奇蹟なども或は本當にやるのかも知れない。さう思つて見れば、頻りに人を救つてやる／＼と「救ひ」を押しつけようとする所なども、同情の餘地がある。けれどもあれだけ突込んだことの云へる男なら、もつと眼先が見えさうなものだ。あんなことをしたつて世間のためには何にもなりはしない。勿論病氣をなほしてもらつたものもあるにはあるだらうが百人や千人の病氣をなほした所で、この人類全體がどうなるものか。教を説くと云つたところで、何もあんな狂人じみた眞似をしないで、私たちにだつてあれだけのことは云へる。殊にあの男のやつてゐることは、まあ云つて見れば、古人の言葉の註釋だ。たゞそれ

を狂人のやうに怒鳴るだけの話だ。私などはとてもあの男の御恩を被る氣にはなれない。まあ、あの男の云つてゐるやうに、貧しいものや苦しむものだけが、何かしらしてもらへばいいだらう。それであの男も人類のためにつくしたなどと考へて、いゝ心持にをさまれるのだ。」

三

或は――

「あの男はたゞ空想家なのだ。空想と實際とをまるきり混同してゐるのだ。だからあんなに威張つてゐても、どこか子供らしい可愛いところがある。しかし一方から考へれば随分可哀さうな話さ。いゝ氣になつて騒いでゐるが、先はどうせ見えてゐる。今こそ世間で評判になつてゐるけれども、この評判なんてものは當てになるものでない。本當に人氣をつないで行かうといふのならあんな風に一本調子にやつてはいけない。あれでは二三年もしたら世間が飽いて來るにきまつてゐる。そのく

せ當人は實にのんきなもので、未來のために何かしたかといふと、何もしてゐない。何か確かな地位があるかといふと、何もない。人氣が落ちたらそれぎりだ。あれでもう三十を越えてゐるといふのだから、少し馬鹿々々しい氣もしないではない。」

四

或は――

「あの男は實に緊張し切つてゐる。うまい食物とかいゝ女とかには眼も呉れないで、五分間でも惜しいと云つた風に働きつゞけてゐる。流行のお醫者だつてあんなに忙しくはない。さうして何の爲だ。パンの爲か。どうもさうでないらしい。あの男は誰に何を呉れと云つた事もない様子だ。では金の爲か。いやさうでもない。金は一文も持つてゐない。持てば直ぐ人にやつてしまふ。國家から榮譽を得るためか。いやあの男はそれを輕蔑し切つてゐる。それでゐてあの男は偉い政治家や仕事好きの實業家よりもつと緊張してゐるのだ。しかもその仕事はたゞ嘲笑や侮蔑で報い

られるきりなのだ。一體何の爲だらう。もしかしたら、この嘲笑や侮蔑が彼にとつて最も大きい幸福であるのかも知れない。鞭うたれて快樂を感じるもの！ 鞭うたれるために絶えず緊張してゐられるもの！ まづさう云つた見當のものだらう。」

五

或は――

「あの男に就ている／＼な批評がある様だが、今輕率にそれをきめてしまふのはどうも穩やかでない。あの男はまだ仕事を始めたばかりだ。本當に天才であるか、また空想家に過ぎないか、あのまゝで押し通して行くか、また驚くやうな進歩をするか、それは皆あの男の仕上げた仕事を見てから判断すべきことだ。人の價値は棺を覆うてから定まる。さう急いで決定すべきものではない。あの男がおれは神だと云つて威張るので、方々から反感が起つて來るらしいが、さう云つて威張つた所で本當に偉い仕事をすれば矢張り偉いのだ。仕事が出来なければ、その時初めて狂氣

の空想家だつたといふ事になるのだ。どつちにしてもあの男の生きてゐる間はさうハッキリした事は云へない。もしあの男が神の様な力を持つてゐるなら、それが明確に實證されてから歸依しても遅くはあるまい。尤も今でもあの男の崇拜者に云はせれば、偉い事になるに相違ないが、反對者の嘲笑と差引すれば、まあゼロになるといふものだ。」

六

宗教家の言葉。

「あの男は大變正直だから人民を欺すにしても大して危険なことはない。その正直といふのは、贋札を使ふ者が誰の目にも贋だとハッキリ解るやうな札を使ふと云つたやうな正直だ。今はあらしの最中だから危険らしく見えるが、あらしが過ぎて了へば、何だあんな事かといふやうになる。元來神が突然人間になつて現はれるなどといふことは、誰が考へても不合理だ。宗教といふものはそんな見世物じみた外

的なものではない。殊にあんな過激な革命ではいけない。内的生命のことは特に進化的である必要があるのだ。我々は目前の民族の最高開展としての偉大な人物を待望してゐるが、あんな體系をはづれた断片的な、民族の生命を知らないやうな、山師じみた人間は期待してゐない。あの男のやうに無暗に社會の暗黒面を摘發したり、知識階級や上流社會に反抗したりするのは、當人にとつては面白いかも知れないが、社會を救済する方法としては全然力がない。現にあの男の感化したのは、たゞ漁夫や職工きりだ。さうして金持や學者はとても信仰が得られないやうに云つてゐる。しかし金や學問があるから駄目だといふやうな宗教は、現在の社會組織を破壊して總ての人を一樣に貧乏人にしてしまはなくては通用しまい。それはたゞ徒らに反抗するといふもので、世道人心に益はない。もつと現實に即した、現代の人心に切實な教を説かなくては、眞に宗教家とは云へないのだ。」

七

哲學者の言葉。

「あの男は教養もなく明晰な思索力もないので、殆んど系統立つた思想を持つてゐない。たゞ異常に強い情熱を持つてゐるので、断片的に感じたことをアフォリズムで現はす場合に、如何にも深い意味がありさうな印象を與へるのだ。しかし要するに一種の妄想狂に過ぎぬ。過度に主觀的で、眼界が狭小で、絶えず同じ言葉を繰り返して、おれは神だといふ様な突飛な考で人を驚かせるのだ。しかしそれきりだ。世界史に少しでも意義ある痕跡を残すやうなことは絶對にあるまい。」

八

聰明なる政治家の言葉。

「あの男は、目下の所では確かに權力を持つてゐる。もし彼がそれをうまく利用すれば、王になることも不可能ではあるまい。しかし彼は、惜しいことに、その權力の利用法を知らない。寧ろその權力を投げ捨てよう／＼としてゐる。彼の努力は

その意味で眞面目を缺いでゐる。それだけに我々は彼を恐れる必要を見ない。彼は現社會のあらゆる勢力を罵倒するが、しかし具體的に一つの黨派を造つて、他の力を壓服しようとするのではない。またいづれかの黨派を助けて他の黨派を抑へようとするのではない。恐らく何人も彼を利用することは出来まい。我々はたゞ彼のなす所を傍觀してゐればいゝのである。少しでも手を出せばきつと危険なことになるに相違ない。殊に彼を退治しようなどとすればそれこそ飛んだ目に逢ふだらう。」

九

彼を嫉視せる男の言葉。

「あの男があんなに評判がいゝのは、とりも直さず俺たちの評判の落ちることだ。成程あの男は人を引きつける奇妙な力を持つてゐる。しかし俺たちよりもそんなに頭抜けてゐるわけではない。あの男が評判になつたのは、まあ手取り早く云へば、民衆が暗示にかゝつたので、云はば一種の流行だ。一體民衆は、權威のありさうな

言葉で何か云はれると、直ぐその前に頭を下げたがる。そこをあの男は實にうまく利用した。しかし今に見るがいゝ。見事に追ひ落してやるから。さうして、お前をかつぎ上げた民衆が本來どんなものであるか、ハッキリ思ひ知らせてやるから。俺たちだつて馬鹿な目を見て、いつまでも辛抱してゐるわけには行かないのだ。」

一〇

彼は自信を言葉に響かして云つた。

——なんぢら互につぶやくこと勿れ。われを遣はし、父もし引かざれば、人よくわれにきたるなし。

一三 總ての芽を培へ

青春を通り越したといふので頻りに殘惜しく感じてゐる人があるやうですが、私はまだその殘惜しさをしみじみ感ずる程な餘裕をもつてゐません。それよりも、やつと自分がハッキリしかゝつて來たといふことで全心が沸き立つてゐるのです。時時自分の青春を振り返つて見る時にはそこに自分の歩かなければならなかつた道と、如何にも「うか／＼してゐた」自分の姿とを認めるきりで、とても過ぎ去つた歡樂を追慕するやうな心持などにはなれません。もう少し年を取つたらどうなるか解りませんが、今の所では回顧する度毎にたゞ後悔に心臓を嚙まれるばかりです。

しかし私は青春と名のつく時期を低く評價しては居りません。恐らくそれは、人生の最も大きい危機の一つであるだけに、また人生の最も貴い時期の一つでせう。

その貴さは潑刺たる感受性の新鮮さの内にあります。その包容力の漠然たる廣さの内にあります。またその弾性のこだはりのないしなやかさの内にあります。それは青春期の肉體のみづ／＼しさと丁度相應するものです。さうして年と共に自然に失はれて、特殊の激變に逢はない限り、再び手に入れることの難かしいものです。

この時期には内にあるいろ／＼な種子が力強く芽をふき始めます。丁度肉體の成長がその絶頂に達する頃で、餘裕の出來た精力は潮のやうに精神的成長の方へ押し寄せて來るのです。でこの時期に萌え出でた芽はたとへそれが生活の中心へ來なくとも、一生その意義を失はないものだと思ひました。例へば藝術家の晩年の傑作などには、よく青春期の幻影が蘇生し完成されたのがあるさうです。また中年以後に起る精神的革命なども、多くはこの時期に萌え出で、さうして閑却されてゐた芽の、突然な急激な成長によるといふことです。それほどこの時期の精神生活は、漠然とはしてゐても、内容が豊富なのです。

しかし危険はこれらの一切が雜然としてゐる所にあります。そこには全體を支配し統一するテーマがありません。従つて總てがバラ／＼です。つまらない芽を大きくするためにいゝ芽が澤山閑却されても、それを不當だとして罰する力はないのです。

實を云へばそのテーマは、各獨特な形で、あらゆる人間の内にひそんでゐるのであります。さうしてそれがハツキリと現はれて來れば、雜然としてゐたものは各その所を得て、一つの獨特な交響樂を造り出だすのであります。しかしそれは何人と雖豫見し得るものではありません。特に青春の時期にある當人にとつては、それは全然見當のつかない、また特別の意義がありさうにも思へない、未知數に過ぎないので。それが初めから飲み込めてゐる程なら、青春は危機ではありません。その代り新緑のやうな潑刺としたいのちもないでせう。

そこでこの青春を、心の動くまゝに味ひつくすのがいゝか、或は嚴肅な豫想によつて絶えず鍛鍊して行くのがいゝか、といふ問題になります。

青春は再び歸つて來ない。その新鮮な感受性によつて受ける全身を震撼するやうな歡樂。その彈性に充ちた生の力から湧き出て來る強烈な酣醉。それはやがて永遠に我々の手から失はれるだらう。一生の仕事は先へ行つても出來る。青春は今きりだ。これを逸すれば悔を永久に残すに相違ない。味へるだけの歡樂を味ひつくさうではないか。——かういふ心持になる時期のあることは、誰でもまぬかれ難い所だらうと思ひます。戀、女、酒或は藝術、さういふものは猛烈に我々を誘惑にかゝるのです。時にはそのために總ての顧慮を捨て、底まで溺れ切らうといふ氣も起ります。それが何となく英雄的にさへも感ぜられるのです。

これは一方から云へばいゝ事に相違ありません。生の享樂を知らないものは死んでゐるのも同然です。底まで味はうとしないのは生に對する卑怯です。もとより享樂に走るものはいろ／＼な過失に陥りはしますが、ゲエテも云つたやうに、

Wer nicht mehr liebt und nicht mehr irrt,

Der lasse sich begraben.

です。頭がぐら／＼したり心が沸き立つたりするやうな目に逢ふのも、生きがひがあるといふものです。

しかしこゝには見のがすことの出来ない危険があります。それは歡樂に身をまかせることによつて、他のさまざまの欲望を鈍らせることです。理想が何だ、道徳が何だ、人生が何だ、と云つたやうな呑氣な心持になることです。ゲエテのやうに、「全的」に、「充滿」の内に生きることを心掛けてゐた人なら、「過去を悔いず未來を樂しみますたゞ常に現前を味へ」と云ふ法則を自己の生活の上に掲げても、別に危険はなかつたでせう。しかし青春の時期にあるものは、この全的に生きるといふことを最も解してゐないので。どこか一方へ偏すればそれきり他の方面を無價値に見てしまふほど、彼らの内の總てのことの根が浅いのです。現前を味つてゐる内に、

成長すべきものが成長せず、いつか人格が歪いびつになつて行きます。さうして、本當の生の頽廢まで行かないにしてもとにかく道義的脊骨を缺いた、生に對して不誠實な、なまこのやうな人間になつてしまひます。これは確かに大きい危険です。

それでは青春を嚴格に束縛し鍛鍊して行くのがいゝか。——勿論それはいい、事です。青春期に道義的情熱を煽り立てるのは、どの他の時期よりも有効です。しかしこの事は多くの場合に方法を誤まられてゐると思ひます。何故なら道義的情熱は内から必然に湧いて出なければ何の意味もない。型にはめる様に外から押しつけるのでは、たゞ内にある生命を窒息させるばかりです。戀をしてはいけない、女に近づいてはいけない、小説を讀んではいけない、芝居を見てはいけない、——要するに生を味はつてはいけない！ それでどんな人間が出來ますか。乾干ひからびた、人間知のない、案山子のやうな人間です。鼻先から出る道徳に塗り固められて何事も心臓で以て理解することが出來ず、また何事も心臓から出て行爲することの出來ない、死

人のやうな人間です。ゲエテも云つたやうに迷ふといふことは生きる證據です。道義の力は迷つた後に本當に理解せられる。まづ生かして見ないで本當の生を獲得させようといふのは、もと／＼無理なのです。そんな型にはめる様な鍛錬は、害こそあれ益はありません。今の青年教育は大概この弊に陥つてゐます。たゞ、性格のしつかりした青年は、反抗心によつてこの教育の害悪から救はれてゐるのです。

私は右の二つの態度のいづれをも肯定し、いづれをも否定しました。ではどうしろといふのか。私はこのことに就て一つのモットオを持つてゐます。それは「總てを生かせよ、一切の芽を培へ」といふのです。云はば自然に成長するまゝに、歪いびつにならないやうにして、放任して置かうと云ふのです。さうしてたゞ、その芽の成長を助ける滋養分だけを、與へようと云ふのです。その成長が自分の希望するやうな人格を造り上げて行かなくても、それは仕方ありません。それは宿命ですから。人力の如何ともしがたいものですから。しかし私は、その成長が歪いびつになることだけ

を、非常に恐れてゐます。一切の芽がその當然成長すべきだけ成長しないのは、確かに罪惡です。それは當人の罪であるばかりでなく、また傍にゐて救ひの手を借してやらない者も、責を負はねばなりません。

こゝに私は困難な、さうして興味ある問題を見出します。何故なら青春期に我々の内に萌え出でた芽は、その滋養を要する點で一々異つてゐるからです。またその滋養が機械的に與へられるものではないからです。

例へば青春期に著しい戀愛の憧憬や性慾の發動には、それを刺戟し強める種類の滋養は必要でありません。何故ならさういふ種類の滋養はわざ／＼與へるまでもなく、日常の生活にありあまる程あるからです。街を歩く。そこに美しい女がゐます。その流動する眼や、ふつくりと持ち上つた頬や、しなやかな頸や、——それは否應なしに眼にはいつて來ます。友人に逢ふ。戀の悩みを聞かされます。その甘い苦しみが人を刺戟しないではゐません。この種類の刺戟はとても數へきれないのです。

殊に餓ゑたるものにとつては、些細な見聞も實に鋭敏な暗示として働きます。しかも戀愛や性慾が人間の性質の内、特にこのやうに刺戟されなければならぬわけではないのです。それは刺戟されなくとも必要なだけには成長するのです。でこの方面には寧ろ鎮靜劑が必要なくらゐるです。特に戀愛の深い眞面目な意味に對する感受性を鈍らせないために、性慾の暴威を打ちひしぐ必要があります。そのためには人格内の他の芽を力強く成長させなくてはならないのです。ワレンス夫人がルッソに與へたやうな親切な救助も、或は一法かも知れませんが、しかしあれは總ての人に望むわけには行きません。矢張り人は自ら救はなくてはなりません。

私は戀愛や性慾に身を委せるのがいきなり悪いと云ふのではありません。たゞさういふ方面の芽は自分で生かせやうと努めなくてもどん／＼のびて行くものだといふのです。さうしてそののびて行くことはいゝことなのです。しかし「總てを生かせよ、一切の芽を培へ」といふ以上、それだけがのびればいゝと云ふわけには行き

ません。もつと他の美的な、道義的な宗教的な、さまざま／＼な芽に對しても、充分のびるだけの滋養を與へなくてはなりません。時には殘忍とか狡猾とか盜心とかいふものに對してまでも滋養を與へなくてはならないかも知れません。(しかしこれらは性慾などと同じく直接的な人間の欲望で、培養するまでもなく人間の内に生きてゐるのでせう。さうしてそれ以上に強められる必要もないでせう。何故なら他の欲望がそれを押へつけようとしてゐますから。)で青春の時期に最も努むべきことは、日常生活に自然に存在してゐるのでないいゝ／＼な刺戟を自分に與へて、内に萌え出でた精神的な芽を培養しなくてはならない、と云ふ所に集まつて來るのです。

これが所謂「一般教養」の意味です。數千年來人類が築いて來た多くの精神的な寶——藝術、哲學、宗教、歴史——によつて、自らを教養する、そこに一切の芽の培養があります。「貴い心情」はかくして得られるのです。全的に生きる生活の力強さはそこから生れるのです。それは自分を或道德或思想によつて縛ることではあ

りません。寧ろ自分の内の總てを流動させ、燃え上らせ、大きい生の交響樂を響き出させる素地をつくるのです。

この「教養」は青春期に於ては、その感覺的刺戟の烈しくない理由によつて、極めて輕視され易いものです。しかしその重大な意義は中年になり老年になるに従つて益々明かに現はれて來ます。青春の彈性を老年まで持ち續ける奇蹟は、たゞこの教養の眞の深さによつてのみ實現されるのです。

元來肉體の老衰は、皮膚や筋肉がだん／＼彈性を失つて行くといふ著しい特徴によつて、わりに人の目につき易いやうですが、精神の力の老衰は一般に繊細な注意を脱れてゐるやうに見えます。しかし我國では、文藝家や思想家の多くは、四十を越すか越さない頃からもう老衰し始めてゐます。これは主に青春期の「教養」を缺いたからです。彼らは青春期の不養生によつて、人間としての素質を鞏固ならしめることが出來ませんでした。頭と心臓が直ぐに硬くなりました。人間の成長がすぐ

止まりました。彼らの内に萌え出た多くの芽は芽の内に枯れてしまひました。そこへ行くと夏目先生は矢張り偉かつたと思ひます。先生の教養の光は五十を越してだんだん輝やき出しさうになつてゐました。若々しい彈性はいつまでも消えないでゐました。

私は誤解をふせぐために繰り返して云ひます。この「教養」とはさまざまの精神的の芽を培養することです。たゞ學問の意味ではありません。いかに多く知識を取り入れても、それが心の問題とぴつたり合つてゐるのでなくては、自己を培ふことにはなりません。私はたゞ血肉に喰ひ入る體驗を指してゐるのです。これはやがて人格の教養になります。さうして、その人が「眞にある筈の所へ」その人を連れて行きます。その人の生活のテエマをハッキリと現はれさせ、その生活全體を一つの交響樂に仕上げて行きます。總ての開展や向上が、それから可能になつて來るので

この「教養」は青春の歡樂を味ひつくす態度や嚴肅に自己を鞭つて行かうとする態度と必ずしも相容れないものではありません。人それぞれにその素質に従つて、いづれの態度をとる事も出来るでせう。しかしいづれの態度をとるにしても、「教養」は人を墮落から救ひます。さうして人をその眞の自己へ導いてゆきます。

一四 衆 愚

私は絶えず自分の眼の届かない「生の深さ」を豫感してゐる。恵まれた瞬間の刹那に、閃光に照し出される生の深淵の朧ろな底の光景は、私に喜悅をもたらすよりも寧ろ私の不安と憂怖とを刺戟するのである。

個性の祕密、運命の不思議、心の流れの豫測し難い行方、突如として起る奇妙な渦、これらに對して自分に何程の理解があるだらう。偉大な人々は底まで見徹した眼で、複雑な生の波紋から鋭い急所を集めて、いくつかの永遠の型を造り上げる。私は眼のきかないはかなさに、頭に出來た型にはめて、總てのものを見ようとする。顧みてそれに氣附く毎に、私は胸を搔きむしられるのである。

然るに何といふ矛盾だらう。私の心は常に、教育ある俗衆に對し傲然としてゐる。私は汗で地を濡ほす日にやけた人々とならば、同じく女から生れた同胞として、互に輔け合はねばならぬ友人として、親切に交はることも出来るが、自分を優良な人間と思ひ込み、百人千人萬人或は百千萬人の上に立つと信じながら、しかも一つとして深い者偉大な者を解し得ず、また解しようとする誠實さへ持つてゐない俗衆に對しては極度の侮蔑と憤激とを禁じ得ないのである。彼らの或者は社會から貴族と呼ばれ、政治家と呼ばれ、高等官吏と呼ばれ、實業家と呼ばれてゐる。また或者は、學者、教育家、思想家、藝術家、記者などと呼ばれてゐる。彼らは高級な物を引きおろし、低級なものを賞讃する。彼らは目前に榮えることを求めて、永遠の價値を顧みない。彼らは眞の道德を蹂躪して形式の道德を振りかざす。彼らは自己と生とに對する誠實の眞義を解せずして、人から奴隸的誠實を要求する。——このやうな非難はいくら重ねても盡きないのである。

この二つの心の矛盾。我々の間には恐らく共通であらうと思はれる矛盾。——私は表面の對照に目を眩まされて、それを矛盾かとも思つたが、しかし考へて見ると實際はさうでなかつた。それは高きに昇らうとする者の、必然の心境であつた。ちやうど山腹にある者が、遙かに頂上を見上げると共に、また遙かに山麓を見おろすやうに。

即ち偉人を尊崇する心（上への距離の感情）と俗衆を侮蔑する心（下への距離の感情）とは、同一の立場の両面である。この場合、謙抑と傲慢とは手を携へて個性の生育を促進する。謙抑は内より個性を刺戟し、傲慢は外に對して個性の腐蝕を防ぐ。何故なら偉人は人間の内から、その本質たる最も個性的なものを引き出し、俗衆は個性の權威を蹂みにじつて、人間を平らかに同型化しようとするからである。卑俗な人間を形容する言葉に、「上に諛ひ下を侮る」といふのがある。形式的に見れば、右の謙抑と傲慢はこの言葉に當て嵌まるかも知れない。しかし事實は正反對

である。この言葉の指すのは、世間的の有力者を敬ひ無力者を侮る所の、純功利的立場であつて、眞の人間の價値には關係しない。従つて世間的に有力な俗衆が尊敬され、世間的に無力な偉人が侮蔑される。これ我々の最も憎惡する不正である。しかもそれは世間に滔々として行はれてゐる。最も活氣に富んだ青年すらも、金權と政權との前に自己の個性を没却する事のみを知つて、その權力者の人格如何は問はずともしない。かくて我々の眼の前には俗物崇拜の時代が現出されつゝあるのである。我々は益々俗衆の痴愚を憤らないではゐられない。

「衆愚」といふ言葉は、イブセンの流行と共に一時我國でも盛んに用ゐられた。さうして遂には、自惚れの強い獨り豪がりの青年たちの合言葉のやうにさへも見られた。がやがて他の多くの意義深い言葉と同じやうに、不理解と淺薄の衣を着せられて、流行の圏外に押し出されたのである。しかし「衆愚」なる言葉は依然として千古の眞理を含んでゐる。プラトオンは俗衆を野獸に比して、その痴愚と腐敗とを

極度に罵り、世俗の嘲笑する哲學者の統治を國家の理想とした。ダンテは俗衆を罰するため地獄を造つた。近代に於て貴族主義と平民主義の兩極と呼ばれてゐるニイチエとトルストイは、俗衆を攻撃する熱烈さに於て頗る相似てゐる。この二人の絶對主義を痛罵して、民衆の欲求を理解し指導し徐々に生活を改善しようと叫んでゐる一人のプラグマチストさへも近頃證據の二三を擧げて短氣に俗衆の愚を嘲つた。いかなる平民主義者と雖も、眞に生活に誠實である限りは、目前の政治、道德、文藝、宗教などに於ける「俗衆の統治」を讚美し得ないだらう。俗衆の價値標準に迎合し、俗衆から自己の價値を定められようとする青年たちの、腐つた意氣を嘲笑する聲が、何故かう寂れてゐるのか。俗衆の統治が人類の文化に危険であることは、ニイチエの言葉を待つまでもない。青年の腐敗が未來の文化を危ふくすることも、またプラトオンを待たなくて明かである。個性の權威のために衆愚と戦ふことは、我々の任務であり又誇であらねばならぬ。恐らく誠實な心の人々はこれに反對しな

いだらう。

しかしその戦の方法はなほ些か問題になる。プラトオンは巨大な野獸と格闘することの愚を説き、退いて静かな生活の内に自己の精神王國を建設せよと云つた。貧民の友耶穌基督は燃ゆる言葉で俗衆を罵つたが、しかも俗衆の権力と同じ武器を持つて闘ふ氣は毛程もなかつた。畢竟彼らにとつては、その個性の發揚完成の努力が、取りもなほさず衆愚との戦だつたのである。このことはニイチェやトルストイの場合にも云へると思ふ。所謂社會改良家が文化に對して何の貢獻をもなし得ず、反つて絶對主義者個人主義者の事業に偉大な功績があるのは、衆愚を導かうとする事、衆愚を正面の敵として積極的に戦ふ事の無意義を實證してゐる。思想家の選舉運動や、權利獲得運動が何らか意義を持つてゐるやうに思ふのは、愚の骨頂である。

私は衆愚も亦惱みある人間だと云ふことを知つてゐる。彼らの傾向を憎むほど個の人間を憎みはしない。しかし私の愛はなほ遙かに彼らを抱擁するには足りない。

生に對する彼らの不誠實を呪ふ心は、絶えず私の内に脈を搏つてゐる。彼らに對する攻撃は、私の彼らに對する愛の頂上である。

衆愚は私の言葉を抽象的概念的として嘲笑するかも知れない。しかし私は最も實務的に働いてゐる人が最も抽象的概念的な見方を固執してゐると考へる。社會的活動に忙がしいことは、必ずしも現實に觸れてゐるわけではない。「生活」とは何か。「生活より遠のく」とは何か。それを解してゐる人は、また抽象的概念的の眞意をも解するだらう。さうして眞に具體的現實的な見方が如何に稀有であるかをも見ぬくだらう。私は機會があつたら、現代の社會組織が、經濟的と政治的とを問はず、如何に抽象的概念的であるか、そのため眞の生活と文化とが如何に害せられてゐるか、それに就て詳しく論じて見たいと思つてゐる。

一五 公衆の喝采

藝術家にとつて公衆の喝采ほど美味なるものはない、と云ふ言葉を、私は何時の程よりか覚えてゐる。こゝに私は一つの眞實の誤まつた表現を見出したのであつた。

藝術家がその製作の理解され同感せられるのを見て喜ぶのは、極めて當然である。彼の製作はそれ自身の價値に従つて獨自の要求を鑑賞者に投げ掛ける。鑑賞者がそれに引き入れられ、それに即して自己の生の昂揚を経験するのは、つまり製作がその要求を實現することである。製作者がそれを喜ばないでゐられる筈はない。それを虚榮として嘲笑するのは間違つてゐる。如何に孤獨を愛し俗衆を嫌つた藝術家と雖なほこの喜びは捨てなかつた。しかしこゝに二つの危険がある。一は世評によつて自分の價値を極められるやうな心持になることであつて、そこに俗衆の支配が始

まる。他は音頭取りに雷同する群集の喝采をも意義あるやうに感ずることであつて、そこに媚びられた虚榮心の誇大妄想が始まる。喝采の美味に酔ふものは、このやうな危険に對して全然盲目である。さうして彼らの内の藝術家的本能は、漸次衰へて死に瀕して行く。

最も高貴な藝術は決して萬人の意に適つてはゐない。萬人の心に入ること最高藝術の重要な條件としたトルストイ自身の藝術すら、通俗的だとは云ひ難い。藝術のこの貴族的な性質は、生に對する誠實を缺いた俗衆が如何に多いかを示してゐる。しかしまた一方にはこのやうな俗衆の時好に投じた藝術もまたあり得るわけである。さうして實際幾多の藝術家は俗衆の低級な享樂欲と興味とに應じて、或はその矜りとする所に媚び或はその意表に出で、あらゆる術をつくして彼らの喝采をねらつてゐる。俗衆はかくの如き製作に於て自己の淫蕩な心を満足させ、野卑な好奇心を喜ばすのである。そこに公衆の喝采があり、藝術家の満足がある。

このやうな藝術家に限つて高貴なるもの永遠なるものを嘲笑したがる。彼らは目前に自己の欲する所を俗衆より與へられてもはや満腹の氣味であるかも知れない。しかし彼らが眞に價值あるものによつて、或は文壇の一隅に力強く頭をもたげた眞正な藝術家思想家の未來ある運動によつて、心の底に不安を感じてゐないとは私に信じられない。彼らの嘲笑は恐らく自己を欺瞞する性格の弱さから出るものであらう。さうして彼らを益々深い泥のなかに引き入れて行くのであらう。

一六 嘲笑と自欺

或物を嘲笑して自らを欺き自らに媚びるものがある。

所謂自然主義隆盛の當時、或人々は理想や努力を滑稽極まる物のやうに嘲笑した。生活その者に對してすらも彼らは嘲笑を控へなかつた。絶望と愚痴、生の醜惡化、それが彼らの看板であつた。さうして彼らは嘲笑するものの常として、誠實なるもの嚴肅なるものに對する優越を感じてゐた。彼らの眞の志向は倦怠と幻滅とに苦しむ貧弱空虚な自己をさへもなほ誇らうとする所にあつたのである。

彼らの運動が根を持つてゐなかつたことは事實が證明した。彼らの多くは今生活の熱愛者の如く振舞つてゐる。或者は曾て嘲笑した理想と努力とを驚くべき無恥な態度で力説し高調してゐたが、遂に更生をさへ装つて時流に投じようとした。さう

して本來の自己の所行と傾向を嘲笑することによつて、自己が何らかの價值あるものを體現したかのやうに思ひ込んでゐる。しかしこの新しい傾向が同じく根のないものであることはその所行が依然として舊の如くその態度が依然として無恥なのに現はれてゐる。

不誠實な人間は自己を誇る都合のために理解し得ない物をも嘲笑する。彼らの眼中には世間體のみあつて、對象の價值如何はないのである。彼らは他人の體驗の深さを理解しようとしないうで、言葉の表面の意味を自己の淺薄な思想に當て嵌めて考へ、どの點で揚足を取らうかと腐心する。従つて彼らの口に掛ると、深い心の記録も、彼らの空虚な思想より猶一層淺薄だとせられる。彼らは議論を都合好くするために、自己の前に嘘をつくことをも恥ぢない。かくて彼らの説く所は、何ら體驗の背景を持たない、具體的統一を缺いた、寄せ集め思想の上の論理的遊戯に過ぎぬ。

例へば彼らが誠實を説くものを攻撃する場合には、「誠實を振りかざすお前より

は誠實を看板にしない俺の方が餘程誠實だ。お前は誠實を缺かないで濟む境遇にゐて誠實であることを誇るが、もし不利な境遇に陥れば恐らくそんな大きな口は利けなくなるだらう。俺はこんな苦しい境遇にゐてもなほ八九分通り誠實に行爲してゐる」と云ふ風な云ひ方をする。即ち彼らは誠實が美德であることを認めながら誠實を説くものにケチをつけ、十分誠實でない自分の方が優れてゐると主張するのである。その實彼らは誠實が如何に重大であることをしみて、經驗してはゐない。若ししてゐれば、誠實を説くものの境遇如何などよりも先づ十分誠實であることの出來ない自分の境遇の苦しさが問題にならなくてはならぬ。しかしそれは曾て彼らの問題にならなかつた。彼らはたゞ、誠實の高調をいくらか煙つたく感ずるために、誠實を説く者を引き下ろしさへすれば好いのである。

およそ不誠實の人の内で、誠實を装ふ不誠實な人ほど卑しいものはない。彼らは時勢に連れて最も氣の利いたらしいことを云ふ。さうして議論の弱點を指されると、

たとへそれが特に力説した點であつても、「それは私の云はうとした所でない、私の説はかなり君の説と近よつてゐる、君はもう一步で僕の立場まで昇つて來られたのだ。」と云ひ得る風に論を組み立てて行く。議論の上で何とか辻褄を合はせて體面を繕ふことさへ出來れば、最初の議論の動機を自分自身で蹂み躪るなどは極めて平氣なのである。しかも彼らは自己の前に嘘をつく瞬間に自分が誠實だと言明する勇氣を持つてゐる。

この種の嘲笑や自欺は強い長い意志の缺乏に因してゐる。大都會人に多い頽廢者（意志の病人）に、嘲笑と自欺の傾向の著しいのは、誰にも氣附くことである。――意志の衰耗は人格から力強い統一を奪ひ、人間をヒステリックにする。そこから出るものは思想でも藝術でも文化でも總て様式を缺いてゐる。様式のない所には統一ある個性がなく、従つて眞の價値がない。嘲笑と自欺とはかくの如きヒステリック思想藝術文化の一つの特徴と見ることが出来るであらう。

一七 杞 憂

私は屢々何でもないことをキッカケにしてきりのない心配を始める事がある。私はさう云ふ時にまた始まつたと思つて自分を抑へようと努力する。しかし次から次へと頭に浮んで來る可能な事實可能な光景は、ダン／＼私の心を引きつけて、瞬時にもその壓力を緩めない。私は今にもその事が起りさうな氣持になつて恐ろしさと苦しさに震へてゐる。

さう云ふことが起る筈のない理窟をいくら筋道立つて明瞭に考へて見ても心は決して安まらない。

そのくせ私は人の心や自分の運命を疑つてゐるわけでもない。たゞ不思議な強い手が、突然總てのものを混亂させて、心配してゐる通り物事を運んで行きさうに思

へるのである。その手のことを考へると總てのものの動き流れてゐることが、特に強く意識されて來る。總ての心が謎に見え出す。自分の力は事の成行を毛程も變へることが出來ない。私はたゞ縛られた人のやうに、じつとして、何か恐ろしい事の起るのを待つてゐなくてはならない。

かうして心配の續いてゐる間に私は可能なことの一々を心のなかで最後まで經驗する。その事が實際起つてもこれ以上苦しめまいと思はれるほどに苦しむ。従つて食欲は減じ生活力は衰へる。日常の出來事は悉くこの大事件の前に意義を失ふやうに見える。従つて仕事は何も手に附かない。

一週間か十日も経つ内に自然の解決が心配を消して呉れる。私は朗らかな軽い心持になつて平生の自分に歸る。いくらか痕跡が残るにしても、實際事件があつた程には傷が深くない。私は時に自分の杞憂を馬鹿々々しいとさへ思ふ。さうしてその杞憂を神經質のせゐにしたり、或は誠實のせゐにしたりして自分を責め又は自分を

勞^{いた}はる。

私は時々自分に起るこの發作をどうすることも出來ない。しかし私はそれを悲しみもしない。實際私はこの發作のために、いろ／＼な心境を解し得るやうになるのである。私には杞憂の極限とその事が實際起つた場合との間に殆んど皮一重の相違しかない事が感じられる。自分の振舞方一つで杞憂は突如現實となるかも知れない。それほど人間の心は微妙で流動的で捕捉し難いものである。或事の實現を恐れて焦焦することが、その實現を豫防するよりも、反つてそれを刺戟し早める場合は決して少なくない。

私はかういふ杞憂の一つによつて、これまで十分理解し得なかつた夏目先生の最近の二三の創作を、心の底から同感して讀み得るやうになつた。私は半年前まで、夏目先生の厭世的な心持をいくらか齒がゆく感じてゐたのである。今でもまだ全然それに歸依する氣にはなれない。しかし先生が、私たちにまだ十分眼の届かない心

の深さを、はつきり視て擱んでゐるといふ氣は確かにする。(先生の歩いた道の他に道がないといふことは、私には堪へられないことであり、また信じたくないことでもあるが、それだけに私はもつと希望に充ちた道を究極まで押し貫いて行かなければ、先生に對して大きな口はきけないと思ふ。)杞憂の内に經驗したことはたとへその心境に對する理解を輔けるとしても人格に影響する點に於ては現實の體驗と全然反對の方向に働くものである。その意味で經驗の重壓が足りない。従つて理解が底まで達したとは云へないかも知れぬ。しかし兎に角心から同感して讀み得るやうになつたのは有難い事であつた。これ丈でも私は杞憂を馬鹿々々しいこととして頭から斥ける氣になれない。

一八 自由

曾て權威に束縛せられた經驗のない人の自由に、深い意義があるだらうか。

束縛のない所に自由はない。絶對的自由も亦束縛の絶對的征服を前提とするのである。自由の意識は恐らく束縛の意識の後に生れたものだらう。

この意味で、私は、諸種の文化と因襲との過重な束縛を受けた民族の方が、文化と因襲との壓力の軽い民族よりも、遙かに幸福だらうと思ふ。

また同じ意味で、自由への欲求を殺さうと思へば、束縛を全然なくするが好い。

これは間違のない人間の心理である。しかし多くの人はそれに氣附かない。

一九 非難を受くる心持

K氏の非難文を読んでからもう百日になる。私はあれを読んだ時すぐ手紙を書きかけたが、自分の心持にまだ不純な所のあるのに氣づいて中途でよした。さうして再び筆をとり得る氣分になるために、百日の時日が必要であつた。今でもK氏を敬愛する心に不純な點が毛程もないとは云ひきれぬ。しかし今はもうその不純な點のまはりに固い結締組織の出來たことを感ずる。その毒素が血を騒がすやうなことは、決してないと信じてゐる。

私はK氏から氏の戯曲を一部もらつた。その時はもうこの生命に充ちた作を涙と感激とで讀んだあとであつた。で直ぐ禮狀を書かうとした。しかしそれを、たゞ氏の住所が不明であつたといふ理由だけで、(友人に早速聞き合はせる手数をさへも

臆劫がつて)先へのばした。少し経つて、友人に逢つた時に、その頃の氏の近況や住所を詳しく聞いて置いたが、あとで病院の名を忘れてゐたために、またぐづぐづと手紙をのばした。かうして追々時日が経つた。私はそれを氣にしないわけではなかつたが、時が経つにつれて筆をとりにくい氣持が嵩じるので、たうとう半年経つても本をもらつた禮狀は書かすにしまつた。

さうして氏の非難文を讀んだ。「原稿は長く書いて、手紙は粗略に書く人は恐らく愛の深い人ではあるまい」といふ句がそのなかにあつた。原稿を長く書いて、書くべき手紙をさへ書かない人は、果してどんな非難を受けなくてはならないか。私はそれを氣にしてゐた。しかし「それを氣にしてゐるのはいゝ」とは私には云へない。私は自分の「臆劫がり」を呪つた。それが神経衰弱のせむであらうと、すばらな性質のせむであらうと、そのもたらした結果から云つて、明かにいやな道德的缺陷である。事がたゞ一本の手紙に關するからと云つて、これを輕視することは出

來ない。同じ缺陷はまた人の生命に關しても、また道の問題に關しても起り得るか
らである。畢竟自分の「臆劫がり」は人を愛することに於てさへも臆劫がらずに
ない種類のものである。——私は自分の日常生活を省みて、いかにこの臆劫がるこ
とに毒せられてゐるかを見た。私は横にしてゐる體を縦にするだけの努力を臆劫が
つて、子供を泣かせる事がある。憂愁に閉ざされ、或は内の問題に縛られた自分の
心を、他人の苦しみに向つて開かうとするだけの努力を惜しむために、妻を泣かせ
ることもある。僅かな誤解を取りのぞくのが臆劫さに、愛著を持つてゐた友人と不
和になることもある。そればかりではない。なすべきことを臆劫がるために、私は
生死の一大事をさへも誤りさうになつてゐる。——私はK氏の言葉によつて、今更
にこの感じを深くした。

もとよりK氏の非難で私の胸にこたへたのはこの一句ばかりではない。私は自分
がK氏の所謂文士の内に屬してゐるとは思つてゐないが、しかし氏の文士に對する

非難は、殆んど總て自分にも當るやうに思へた。たゞ手紙のこのために、右の一
句が特に鋭く胸に響いたといふまでである。

それでは何故すぐに手紙が出せなかつたか。手紙を書いてゐる途中に、どんな心
の濁りに氣づいたか。——それを白狀するのは苦しい。自分ながら淺ましいと思ふ
ほどな卑しい心理がそこに閃めいたのであつたから。——しかし私は恥かしい思を
忍んで白狀しないではゐられない。——私の心にはほゞ三つのものが、首をもたげ
て來た。「自分を非難するものに對する盲目的な反感」と、「非難する者が自ら非難
せらるべきことを敢てしてゐる矛盾に對する冷笑」と、「氏の作を今更ほめるのがい
かにも人真似らしくて厭だといふ卑屈な考へ」とである。あの非難を讀んで反射的
に手紙を書き始めたときの緊張した心持のうちに、かういふ厭なものかひそんでゐ
ようとは、自分ながら思ひもよらなかつた。しかし事實は覆ふわけに行かない。手
紙を書き始めてから半時間ほど後に、ふと筆が滯り始めて、確かに私は右のやうな

感じに捕はれてゐたのである。もとよりそれは私を壓倒するほど強いものではなかつた。そんなことをまるきり感じなかつたやうな振をして、そのまゝ書き續けて行くことも、さほど困難ではなかつた。しかしかういふ心持であつた非難に答へたところで、それが何になるだらう。もし書くなら、反感も冷笑も卑屈な考へも皆さらけ出してしまふがよい。——けれどもそれも亦私には出来なかつた。私は氏の戯曲の技巧にかなり強い不満を感じたとしても、涙なくしてこの書を読むことは出来なかつたのである。氏の非難文を更に非難したい氣持はあつたとしても、氏の非難に胸を刺されたことは事實なのである。——私は筆を投げて機會を待つほか仕方がなかつた。

氏の攻撃的な論文に愛よりも憎みを感じたのは、私だけではあるまい。氏が心底に一種の怒りの感じをもつて書いた以上、その怒りが讀者に迫つて來るのは當然だと思はれる。私は自分が氏の憎む人々の内に加はつてゐると考へて、一種不快な

感じを禁ずることが出来なかつた。さうして悪行をなす時にさへも心が濡れてゐな
くはならないと説く人が、他を非難するのに刺とげのみを以てして心の潤ひを示さな
い矛盾を、冷かに批判しないではゐられなかつた。私は自分の苦しみの上に氏の愛
の手を感じるよりも寧ろ氏の憎みの手を感じて、氏の思ひやりのないえぐり方を殆
んど憎みさへもした。さうして、貧しいバンを得るために心にもない文章を作り、
絶えず自分の空虚を嘆きながら、しかもそこから足をぬくことの出来ない或種の人
人の、憂愁に充ちた焦燥が、氏の攻撃によつてどれほど強められたかを思つた。ま
た運命づけられた不幸な性質を、自ら苦しみ呪ひながら人の前に出さないではゐら
れない。或種の人々の、ひそやかな心の不幸を、氏の攻撃が更にいかに不幸にした
かを思つた。氏は眞に人間としての徳を現在所有してゐるか否かに就てよりも、徳
に對する無關心を攻撃するのだと云つたが、しかし氏の攻撃した多くの點は、徳の
缺乏に關してゐる。例へば氏は「他人の心を受取る用意の出来てゐないこと」を攻

撃する。しかしこの用意を心がけながらも、感じの鈍い性質のために、或は強すぎる我執のために、絶えず他人の心を傷けてその傷けた事を絶えず苦しんでゐる人の苦しみには同情する所がない。また例へば氏は、愛と祈りとを以てする他人への奉仕の缺乏を非難する。しかし氏はこの奉仕をなし得んがために、自分の憤怒と戦ひ自分の嫉妬心と戦ひ、自分の名譽欲と戦ひ、自分の自欺の傾向と戦ひ、自分の肉體的快樂と戦つて、しかもなほ自分が「怒り易く、嫉妬深く、自欺に傾き、肉體的快樂に感じ易い」のに苦しんでゐる人の苦しみには同情する所がない。これらの事によつて氏の攻撃が、魂の不幸に苦しめる或人々の心を傷けるだらうことを、氏はあまりに思はなさ過ぎる。私一個としても、一年前に輕はずみにやつた淺ましい論争を、齒がみして恥ぢ悔んでゐる。恥ぢ悔みながらまた事に觸れて人と論争し、さうして直ぐあとで同じやうに恥ぢ悔む。甚だしい時には、言葉を口から出した直ぐその場でもう恥と悔とに心臓をしめつけられてゐる。それは恥と悔とが深くないため

だ、魂を鑄直すほどに熱を持たないからだ、と云はれ、ば、私には一言もない。しかし私は自分の惡徳が容易に征服されないのに苦しんでゐるとは云へないだらうか。大願の前に自ら鞭うつてゐるとは云へないだらうか。私は自分の輕薄を承認する。しかし私は輕薄を心底から恥ぢ、また憎んでゐる。私は自分が人と不和になり勝ちなことを承認する。しかし私はその不和のために健康を害する程に苦しんでゐる。輕薄な性質が容易になほせないから、和解が容易に自分にやれないから、私は攻撃されても仕方がない。しかしその攻撃は濡れた心でしてほしい。私は十字架を負ふべきものであることを知つてゐる。しかしそれを負ひきれない弱さの故に苦しんでゐる。たゞ十字架を負へといふ忠告だけでは、私の苦しみは輕くはならない。私は或人の「名に對して敏感なる、怒り易き、嫉妬深き、空言と自欺とに巧みな、肉體的快樂に感じ易き、利己的な」悪しき性質を心からゆるし、さうしてその人に對して愛と祈りとを以て、全然受身に、奉仕することが出來れば、今私を苦しめてゐる

不和を解決するのが容易であることを知つてゐる。しかし私はそれが出来ない。その人の顔を見さへすれば私の心には怒りの感が湧き上つて来る。さうしてK氏が、これらの悪徳の所有者である文士に向つてなしたやうに、たゞその悪徳を指摘するだけのことをしても、この不和は十倍も二十倍も烈しくなるのである。私はその人の前では、悪徳を指摘するどころか、悪徳を見せつけられる時の不快と怒りとをさへ、極力押へつけてゐた。しかし僅かな平和をさへも持ちこたへる事が出来なかつた。「荒らす者への敵意」を胸深く藏してゐただけでも、遂に不和は來た。さうしてこの「敵意」の故に、不和の來たのを當然として承認せざるを得なかつた。この敵意を持つことが既によくない。しかし荒らす者に對してさへも敵意を持たずに濟む程の心持になれといふのは、私に一躍して聖人になれといふ事である。私は心からなりたく思ふ。しかし今こゝで直ぐに聖人になれないからと云つて非難せられるのは、私には荷が重過ぎる。非難するK氏の方でも、いかに和ぎたいと願ふ心があるにしても敵意を以て對する以上は同じことである。愛と祈りとを以てする奉仕の勧めは、氏自身に向つて歸つて行かねばならぬ。さうして氏自身も「自分のやつてゐることと、N氏のやつてゐることを比較して見るがいゝ。そして少し恥ぢるがいゝと思ふ。」

これがその時の氣持の大要であつた。なほその他にも、信心決定してゐないものが信心を文化として研究し得る心事を理解することが出来ない、といふ嘲笑のことはひどく私の胸にこたへた。私は佛教文化や基督教文化に興味を持つてゐる。しかし私にはまだ人に語り得るほど決定した信心がない。私の興味は恐らく生死の一大事を誤魔化してかゝる所に起つてゐるのである。しかし佛教や基督教の中核をなす信仰に飛びかゝつて行けないものが、せめてもその中核をつゝむ果肉に觸れて見たいと願ふのは、それほど理解し難いことであらうか。眞實信心を持つてゐないくせに、僧侶や牧師や宗教家や經典學者となるよりも、自分の分を考へて宗教の外圍

に留まり、内に入り得る門の扉が開かれるまで、外壁をぐる／＼と廻つてゐるものの方が、まだしも見所がありはしないであらうか。殊に宗教文化の研究は、宗教を文化として研究するといふよりも、宗教のひき起した文化を研究するのである。信心そのものの研究よりも、信心を中心として起つた民衆の心生活の研究である。そこには眞實信心を求めて得られないもの、誘惑に負けて退轉したもの、享樂生活との妥協點を見出して中途半端に留まつたもの、その他我々の理解し得る心理を持つた無数の人々が現はれて来る。そこには永遠の人性問題が未解決と解決との間を彷徨し、迷ひ、埋もれ、掘り返され、さうして幾千萬億の過去の人間が、我々と同じ涙を流したことを示してゐる。我々はその多衆と共に、信心し得ない苦しみを苦しみ、知り得られぬ絶對の境地にあこがれることが出来る。これが理解し得られぬ心事であらうか。氏が親鸞を描き得たあとで、このやうな非難を我々に加へた心事を省みれば、およそ人間の弱さから生ずるさま／＼の誤謬は、理解し得られぬことは

あるまい。――

これらの感想は、勿論、押へられた心の隅で蠢いてゐたのであつた。しかし私はそれをきれいに洗ひ去ることが出来なかつた。さうして、生死の一大事の前に、苦しく緊張した心を以て、地上の運命のはかなさを痛感してゐる氏の心事を思ふとき、我知らず顔を赤めないではゐられなかつた。自分はこれほどダレ切つた、のんきな生活をしてゐながら、まだ僅かなことで自分を守らないではゐられないのか。氏のあゝいふ風に人を非難せずにはゐられなかつた心持が、どうしてすなほには受け入れられないのか。私は自分の卑しさを思つて、永い間心を閉ざされてゐた。

幸にも自分のいやな心持はだん／＼薄れて行つた。なるほど氏は自分を責めず、他を責め過ぎてゐる。さうして非難が自分の上に歸つて行くやうな矛盾を犯してゐる。しかしそれは第一の問題ではない。重大なのは、氏の言葉が眞實であるかないかである。「自ら揣らずして高い高い標準を立てた」氏が、自ら立てた標準によつ

ていかに鞭たれねばならぬかは、氏自身にまかせて置けばいい。非難された我々は非難の言葉の眞實によつて壓迫せられねばならぬ。そこには慰めがなくて、苦しみを鋭くする刺がある。さうしてこの同じ刺によつて共に苦しみを感ずる時に、非難したものゝ非難せられたものとの心が結びつくであらう。K氏の憎んだのは悪徳であつて人ではなかつた。私の非難せられたのは、私の内の悪徳であつて氏の戯曲を讀んで泣いた私ではなかつた。たとへK氏が「悪徳」をせめるに急であつて、その蔭に隠れてゐる「人」をいたはるのを忽にしたとしても、さうしてそのために涙を以て人を罵る心持が十分あの攻撃文に現はれてゐなかつたとしても、その穿鑿は今更するに及ばない。K氏がいかに人間をいたはるかには、氏の戯曲について見ればいい。この攻撃文からは、たゞ自己を反省する機縁を得ればいいのだ。この攻撃文の内に個人的な憎悪を感ずるのは、あまり淺墓であつた。

かうして私は、涙する心持で再びあの非難文を讀む事が出来るやうになつた。之

はたゞ文壇といふ狭い世界への非難ではない。大部分は人間全體に對する警告である。私は文章を書くものとしてよりも、或は所謂眞理の探究者としてよりも、たゞ一個の人間として、特にともすれば生死の一大事を忘れがちな、のんき過ぎる求道者としてこの警告を受けたい。信なくして徒らに生活の重心をふらつかせてゐるのは、現代人の通弊ではあるが、現代の物質主義を呪つて人間の生活を本道に歸したいと願ふ學者や文人に人間としてこの弊のあることは、軽く見ては過されない。氏の非難がいかなる倍音を伴つてゐようと、氏の提出した諸問題は、永遠に人間に對して解決を迫る力のあるものである。少なくとも人間になくしてはならない願望として氏のあげた五つの事は、不斷に我々の關心事でなくてはならぬ。而も我々の日常生活は、いかに瑣末な道草に充たされてゐるか。それに氣づく時には、我々は思はず戰慄しないではゐられない。しかし翌朝にはまた瑣末な道草に心を奪はれてゐる。さうして大事を閑却した罰として、眞實の生活から離れ、心の平衡を失ひ、生

きながらの地獄道に墮ちる。私はかくの如き自分の迷誤を承認する。さうして氏の警告に感謝する。

我々は永遠の生なくしてはこの生があまりに空虚であることを感ずる。しかも何故に我々はこの問題を逃避するか。恰も死といふものが我々の上にかゝつてはゐないかのやうに、現前の生活が永久に續き得るかのやうに、のんきな心持で自分を欺いてゐるのである。愛する者の死に會つた時でさへも、我々はその悲嘆を中途で誤魔化してゐる。何故に我々は突きつめられるだけこの問題を突きつめて行かないか。愛する者と永久に別れたくない願望を、何故に曖昧な望としてほつて置くか。さうして問題の解決には何のたしにもならないうまい食物や香ばしい飲料に氣をとられてゐるか。

我々は自分の苦しみを他人の苦しみを取り除きたいと思ふ。魂と魂との抱き合ふしみぐとした調和を、自分の生活の内に造り出したいと思ふ。しかも我々は

何故に僅かな悪意によつて人を憎まないではゐられないか。少しばかり自分の都合が悪くからと云つて、何故に求むる者の願を充たしてやれないか。

我々はこの世に生きるために、たゞ僅かな食物と粗末な衣と小さい家とがあればいいことを知つてゐる。さうして自分に必要以上のものは、もつと貧しい者に分ち與へるべきだといふことも知つてゐる。しかも何故に我々は感覺を喜ばせるさまざまの贅澤品を缺くことが出来ないか。何故に柔かな衣と美しい室と明るい燈火とを缺くことが出来ないか。さうして何故に貧しい者の生活から目をそむけるか。

我々は正しくないことをこの世から驅逐したいと思ふ。しかし贅澤な生活を求める民衆の欲望がひき起した大仕掛な人間殺戮が目の前で行はれてゐても、日々の新聞によつてその報告を読み、疊の上に寝そべつて心に憤りを感じてゐるきりである。何故に我々は道のために身を以て働きかけて行かないか。幾百萬の人間の血が正しくないことのために流されるのを何故に傍觀してゐるか。

要するに私は正しいと感ずる生活に眞裸になつて躍り込むことが出来ないのである。それは卑怯に相違ない。私はそれを恥ぢる。しかし恥ぢるだけでは何の解決にもならない。眞の勇氣が私をふるひ立たせるまでは私は苦しまなくてはならぬ。さうしてその苦しみをのがれるために、私は心に隙ある毎に妥協點を見出さうとつとめるだらう。幾千年來無數の人間がそれをやつたやうに。さうしてまたこの卑怯な逃避の故に更に新しく苦しまなくてはなるまい。

私は信弱きものの苦しみをつくつくと感ずる。しかしこの苦しみを共にする人を周圍に持ち得ただけは私の幸福である。

K氏は永い病に苦しんでゐると聞く。私はこの一文が氏の心持を騒がせない事を祈つてゐる。氏の病が氏の信仰によつて打ち克たれるだらうことは、信弱き私にも信じられるやうに思ふ。

110 心と言葉

—

心と心を觸れ合はせるには言葉だけに頼ることは出来ぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつてその間にそこばくの距りが感せられるやうな場合には、特にこの不完全が目立つて来る。思ふことを單純に云ひ現はしたつもりでも相手がまるで違つた方向に刺戟を受けることは珍らしくない。觸れ合はうとする心はいつまでも言葉の奥に縮こまつてゐて、中心を離れた枝葉の問題の上に、立たしい神経と我執とを衝突させるのである。興奮の度が強まれば強まるほど、言葉の不完全が産み出すこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。

しかしこの不完全な言葉を使つても心が何のこたはりもなく素直に向ふへ通ずる

こともある。時には其言葉の必要さへもない。それが言葉の上の詳しい説明や了解を必要とする筈の場合に於てもさうなのである。

だから言葉によつて心を通ずることは出来ぬと云ひ切るわけには行かない。しかしまた言葉で説明しさえすれば心は通ずるものだと云ひ切ることも出来ぬ。

二

心を通ずるのは心の論理がとほつてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の内に現はれてゐても心の論理がとほつてゐなければ人の心を承服させるわけには行かない。

例へば或人の行爲に對して非難の心持を経験するとする。その行爲の正しくないことを指摘してそれを改めさせるのは確かにいゝ事である。併しその行爲の正しくない所以をいかに明白に説明して聞かせてもそれが頭の論理で押しつめられて行く間は相手は決して承服するものでない。こちらの立場から相手の行爲を不正と判断

しても相手は相手の立場で何かしら辯解を持つてゐる。その辯解を悉く説き破つたところで相手の心は反撥の力を強めるばかりである。純粹に理論の問題を討議するやうな具合には、決して行くものでない。

それは人間の行爲がその人の性格や氣質に根ざしてゐるからである。當人にも頭の論理だけで自分の行爲を支配することは出来ない。彼が道徳的反省によつて自分の行爲を制御しようとする場合には著しく自分の心の論理に頼つてゐる。(もしこの事がなければ古來の倫理學は物理學と同じ運命を享受し得たであらう。)それ故に他から頭の論理で押しつめられてもそれによつて行爲を改める情熱が湧いてくる筈はないのである。むしろ彼の性格や氣質に對して十分同感して呉れない相手の心情や、論理的に自分の立場を覆へさうとして來る相手の征服欲などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも遙かに強い刺戟を彼に與へるのである。

たとへ忠告者の心に正義に對する情熱が燃えてゐるとしても、又その忠告が非常

に正しいことであるとしても、相手はその忠告の内に同情を感じずしてたゞ征服欲を感じるのみであるならば忠告者の心は遂に相手の心に觸れることが出来ないであらう。忠告者が相手を好くしようとしてゐる親切な心もかういふ場合には現はれる場所がない。いかに言葉でそれを説明しても相手の心には響かない。言葉は畢竟空である。

三

匹夫も志は奪ふ可らずといふ古い言葉がある。頭の論理のみを以てしては、正に其通りである。もし上役から頭の論理だけで押しつめられてすつかり參つてしまふ男があるとすればそれは利害打算の上からさういふ振をして見せるのであつて（若しくは自分自身に對してもさういふ假面を被るのであつて）決して正直な心の持主ではない。

意氣に感ずるといふ古い言葉がある。心の論理による説教にはこの現象を見るこ

とが多い。心の論理の地盤をなすものは愛であつて愛は心と心とを結びつける最勝の力だからである。

四

もとより愛にはさまざまの種類や程度がある。それに従つて心の論理の鋭さや力にもさまざまの差異がある。他人への奉仕が素直な心持で出来る人、他の心への没入が何の礙もなく出来る人、——さういふ人の心の論理は鋭くて強い。彼は我執をまじへずに相手の心になり切つて、その心のなかで自分を高める努力により、相手の心を自分の方へ引きつけるのである。

しかしこの境地に達するのは容易でない。我々は自分の愛する者をよくしようと努める時にも、自分のために相手をよくするといふ傾向を脱し切らない。相手を非難するにも相手の心持になつて見た上のことではなくいきなり自分の標準をあてよめて行く。そこにはいつも心の融通を妨げる狭い我執の殻がはたらいてゐる。（そ

それは憎悪や復讐や凌辱や殘虐やなどの、つきつめた、率直な、大らかな現はれにも一種の莊嚴を感じる心である。)で我々は、自分を押へ、他に觸れるのであるが、それでも我執の響を向ふの胸に傳へることが極めて多い。時には我執を露骨に出したい衝動を感じる。強ひてそれを抑へるといかに自分が相手の機嫌を取るために自分を欺いてゐるやうに感ぜられるので、自分に對して正直であるといふ意識を失はないために、わざ／＼自分の我執を曝露して相手の我執に衝突して行くこともある。しかしかういふ「正直」によつて我々は自分の心の全體を現はすことは出来ない。むしろそれに妨げられて自分の心の大部分が相手に通じなくなる。非難する心持を押へて相手に同感しようとする場合の方が、非難の言葉を明らさまに相手に投げつけた時よりも反つて非難を徹底させ得るものである。明らさまな非難の言葉は相手の心を固くして心全體を觸れ合はせる機會を見す／＼逃してしまふ。

現實曝露といふ事に對する我々の衝動は、自然主義の洗禮によつて得たものであるが、ともすれば現實隱蔽の結果を引き起すやうに思はれる。心の生活に於ける現實は流動的であつて、不斷に進轉するものである。或一つの悪い性質を持つたものも、その性質を凝固の状態に放置するとは限らない。この點に就て改造の苦心を認めない(或は重んじない)單なる現實曝露にあふと、人はむしろそこに一種の惡意を(他人の不幸を喜ぶ心を)感ずるだらう。さうして彼の心は閉され、彼の動きつつある現實は相手の心に通じなくなるであらう。この場合には自分の氣づいた現象を相手の眼の前に曝露して見せない方が、反つて深い現實に接觸する機縁を與へるのである。

現實に眞に關與させるものは批評的な觀察ではなくして愛である。頭の論理ではなくて心の論理である。

五

或心の状態を現はす言葉は複雑な組織を土臺として現はれて來る。だから同一の

言葉もそれを使ふ人の人格の異なるに従つてそれ〴〵に異なつた色調や倍音を伴ふ。言葉を通してその背後にある人格が滲み出し響き出すのである。

心を現はす言葉の妙味はこゝにある。それは單なる知識の集積によつては些かも深められるものでない。たゞ正直に、その人の築き上げた生活を曝露する。何の假託をも、虚飾をも、許さない。同じ言葉を使つて同じやうな心生活を表現しようとするのは、各人の自由であるが、それによつて眞實に表現せらるゝ心生活は言葉が同一であるやうに輒くは同一であることが出來ない。その人が獲得した生活の高さはいかなる場合にもその人の言葉の内容に或限界を與へる。基督と同じ眞理を語ることは、若しくは基督以上に深い眞理を語ることは、廿世紀の今日では極めて容易であると考へてゐる人が、我々の眼前にいかに多いことであらう。しかしまだ何人も基督の如き力と愛とをその言葉から響き出させたものはない。貴いのは言葉ではなくて言葉の奥にひそむ心である。

六

もとよりこの種の問題は、人と人とが直接に觸れる場合と、或製作物を通して人に觸れる場合とによつて、幾分か事情を異にしてゐる。前者は或特殊な心に觸れる事を意識して直接的實踐的結果を目指してゐるが、後者は必ずしもその觸れて行かうとする相手を目の前に置いてゐない。だから後者の場合には、一般的に或心理、或考へ方を取扱ひはするが、特に或特殊な個人を相手として、その心を細やかにいたはり、その心に深く没入するといふ必要はない。だから對個人的に優しい人も、その著作によつては、荒ぶる獅子の如く咆哮することがある。

しかし押しつめて行けば根本に於てはさほど異なる所がない。前者は特殊な個人を相手とし後者は「人間」そのものを相手とするので、對個人の座談と對群集の演説との間にあるやうな差異は脱れることが出來ないが、共に相手が人間の心である以上、接觸の方法に難易はあつても觸れて行かうとする志向は同一であるべき筈で

ある。

一人の個人に對するやうな心持で、人間全體に對し得ることは、容易には到達せられない境地であらう。しかしそれは人間の心の貴さを知るものにとつて望まないではゐられない境地である。

七

我々は自分の云はうとする所を頭の論理によつて是認しなければ口へは出さない。しかしその言葉は、自分の心を右の論理の筋道の通りに相手に傳へるとは限らない。そこで我々はいかなる程度に自分の心が相手に傳はるかによつて逆に自分の心の状態を知ることが出来る。言葉が心を傳へない時には、ともすれば、心が既に相反してゐるものである。相手の不理解を責める心は、既に相手に對する侮蔑や非難によつて充たされて居り、相手の不理解に失望する心は、既に相手に對する愛を弱められてゐる。他の心との接觸に躓いた時は我々は先づ自らを省みるべきである。

眞實を云へば相手の不理解や缺點は、自分の行爲の辯解とはならない。自分はまだ自分の力の不足を責めればいゝ。さうして自分の内の不純なものを焼きほろぼして行けばいゝ。

二 樹の根

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐても松の樹の根が地中でどうなつてゐるかはあまり考へて見た事がなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨がふると幹の色はしつとりと落ちついた、潤ひのある鮮かさを見せる。緑の葉は涙にぬれたやうなしほらしい色艶を増して来る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽やかな氣分が、樹の色や光の内に漂うて、いかにも朗らかな生の喜びがそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折ふし可愛い小鳥の群が活き／＼した聲で囀り交はして、緑の葉の間を樂しさうに往き來する。——それが私の親しい松の樹であつた。

しかるに或時私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる所に佇すんで、砂の中に喰ひ込んだ複雑な根を見まもることが出來た。地上と地下の姿が何とひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、——それに比べて地下の根は、戦ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力をつくしたやうに、枝から枝と分れて、亂れた女の髪の様如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つてはゐた。しかしそれを目の前にまぎ／＼と見たときには、思はず驚異の情に打たれぬわけには行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下の苦しみが不斷に彼らにあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼の苦しみの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼の苦しきやうな顔を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。しかしその叫び聲や萎れた顔も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の

快活に歸つて苦しみの痕を滅多にあとへ残さない。しかも彼らは、我々の眼に秘められた地下の營みを、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、實はこのやうな苦勞の上にのみ可能なのであつた。

この時以來私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感ずるやうになつた。彼らは我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

二

私は高野山へのぼつた。さうして不動坂にさしかゝつた時に、數知れず立ち並んでゐるあの太い檜の木から、何とも云へぬ莊嚴な心持を押しつけられた。なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。この地をえらんだ弘法大師の見識にもつく／＼敬服するやうな氣持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて平野から切り離された、急峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たか解らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどなどつしりとした、迷ひのない、壯大な力強さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた／＼と人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地下の烈しい營みは既に地上一尺のところにも明かに現はれてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つてあの亭々たる巨幹を支へるために、太い強靱な根は力限り四方へひろがつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて薄い地の層の間に複雑にからみ合つてゐる有様は、想像するだけで我々に驚異の情を起させる。

確かに山は烈しい生の力の營みによつて、残る所なく包まれてゐるのである。我

我はそれを肉眼によつて見る事は出来なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出来た。隠れたる努力の威壓が、神祕の影をさへ帯びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして地下の營みに没頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遅くない。

三

成長を欲するものはまづ根を確かにおろさなくてはならぬ。
上にのびる事をのみ欲するな。まづ下に喰ひ入ることを努めよ。

四

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。
四十に近づいて急に美しい花を開き豊かな果實を結ぶ人がある。下に喰ひ入る事に没頭してゐたからである。

私の知人にも理解のいゝ頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしなない人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒せられて自分のやうなものは生きる値打もないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の根が一つの地殻の突き當つてそれを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現せられた時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。——私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生れる筈はない。

五

古來の偉人には雄大な根の營みがあつた。その故に彼らの仕事は、味へば味ふほど深い味を示してくる。

現代には、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすればそれが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍らしい變種が出来らうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかと

か、すべてがあまりに人工的である。

天を突かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生れる筈がない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大なる根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

六

根のためには、出来るならば、地の質をえらばなくてはならぬ。

果實のためには、出来るならば、根を培ふ肥料をえらばなくてはならぬ。

根に對する情熱を鼓吹し、その根の本能的に好むところの土壤のありかを教へ、さうして幾千年來堆積してゐる滋養分をその根に供給してやるのが教育の任務である。特に大學教育の任務である。

大學が植木鉢に墮するか否かは、人の問題であつて制度の問題ではない。大きい根を尊重することを知らない經營者の下にあつては、いかなる制度の改革も、遂に

五十歩百歩に過ぎないだらう。

七

教養は培養である。それが有效であるためには、まづ生活の大地に喰ひ入らうとする根がなくてはならぬ。

人々はあまりに根の本能を忘れてゐはしないか。いかに貴い肥料が加へられても、それを吸収する力のない所では何の役にも立たない。私は教養の機會と材料とが我の前に乏しいとは思はない。たゞそれに相當する根が小さいのを忘れる。

汝の根に注意を集めよ。

思索と藝術

一 リップスとニイチェ

リップスの倫理學がカントを地盤として立つてゐることは、何人も疑はないであらう。更にそれがフィヒテと密接に關係してゐることは、——即ちそれがフィヒテの方向に延長せられたカントを地盤としてゐるのであることは、——リップスがいに實踐理性を重んじたか、またいかに純粹我の思想を生かしたかを見るときに、何人も抗まうとしないであらう。しかしそれは自分にとつて特に興味のある問題ではない。自分は自分の注意の傾く方向に従つて、リップスにニイチェの倫理學説の完成者を見る。——これはあまりに輕率な云ひ方であるかも知れないが、恐らく一面の眞理を云ひあててゐるだらうと思ふ。ニイチェがその思想感情の横溢のために陥つた混亂の内から眞に高貴な心情を以て叫んだ所の眞理は、リップスによつて殆

んど外見を異にするほど整然たる思想的心理的明晰の内に説かれてゐるからである。しかし一人の人に十全を望むことは出来ない。心理的事實に就てのリップスの驚くべき明晰な力強い思索にも、それに相當する程度に鋭く深い心理觀察眼は伴つてゐなかつたやうである。(恰もニイチェにその鋭い深い心理觀察眼を充分生かせるだけの力強く明晰な思索力が缺けてゐたやうに。)我々は輕々しく二人の優劣を論ずべきでない。

私は基調の類似として、先づ第一に「積極的なものの肯定」を擧げたい。この二人にとつては、人間性質の何物も滅却さるべきでない。人格内容の總ては、より偉大に、より力強くならなければならない。人格に於けるあらゆる偉大と精力と活力とは、たとへその横溢や結果が恐ろしいものとなつても、それ自身に於て價値あるものである。従つて人格内容に關する總ての否定は惡と呼ばれなければならない。あるべきものがなく、強烈なるべきものが弱い、それが惡である。世上に「悪い性

質」と呼ばれてゐるものも、それ自身に於て悪いのではない。人格内の或弱さによつて、元來無垢である性質が惡に化するのである。かるが故にニイチェは人間の矮小を嘆いて、「もつともつと惡く、もつともつと善く」なることを要求した。リップスは、惡人とはその實意欲せざる者である、精神上の貧乏人、弱蟲、病弱者であると云つた。

しかし右の斷定には直ちに人格内容の階級が附き添うて來る。總ては滅却せらるべきではないが、低きものは高きものに征服せられなければならない。より善きものはより高き程度に存在して、支配者とならなければならない。即ち二人の要求する所は、最高の動機が人格の主權者となることである。

然らばこの高下の階段は、何によつて定められるか。低級なるものと高級なるものとの秩序は、何によつて獲られるか。その道は唯一つである。人は自己を、人間を知ることによつて、ニイチェの意味の「心理學者」となることによつて、その目

的を達することが出来る。——こゝに於て道德の問題が體驗と認識の問題に還元せられるのもまた止むを得ない。リップスは云ふ、我らは完全なる道德的心情を有するの名譽を擔はんがためには、一切を知り一切を享樂し、人類が遭逢し得るあらゆる歡喜と苦惱とを悉く鋭敏に感受し得る人となることを要する。我らは就中十全なる自己認識を所持して、自己發動のあらゆる方式の價值と非價值とを明瞭に透察することを要する。我らは又あらゆる自己以外の人格と、そのあらゆる價值と非價值とを自己の中に包攝することを要する。約言すれば我らは小宇宙に——世界と人類との洩らすところなき鏡にならなければならない。——かくの如き高所に達し得た者が、リップスによれば「人」であり、ニイチェによれば「超人」である。（従つてリップスによれば我々は「人」の一部ではあるが「人」ではない。ニイチェによれば我々は人であるが「超人」ではない。）こゝで眞正の意味の哲人が、我々人間仲間での最も深大な認識者である故を以て、我々の人格内容の階段を最も完全に近く

定め得る人となるのである。

こゝまで來ると、二人の間の小さい（けれども外見上かなり大きいものと思はれてゐる）相違が、目に附いて來る。ニイチェはこの點から更に一步を進めて、右のやうな哲人が、天才が、人類に人格内容の價值の高下を教ふべきことを力説し、更に進んでは、彼自身にかくの如き哲人の權威のあることを主張するのである。しかしリップスにはこのやうな傲慢がない。従つてニイチェがあらゆる道德的現象に就て批評し教へようとするに反し、リップスは學者らしく冷靜に道德の方式を説く。

さて第二の基調の類似として、人格價值の尊重を擧げたい。リップスは物的價值と人格價值とを峻別して、人間の價值がたゞ人格價值にのみ懸ることを極力高調する。人格の價值を構成するものは、彼に従へば、人格のちからといふのちを示す積極的なるもの一切である。さうしてこの人格價值を高めることを外にしては、生の意義目的は何處にもない。これらの主張が全然ニイチェに合してゐることは殊更

説き立てるまでもないだらうと思ふ。

人格價値の絶對的尊重が我らの日常生活全般に關係して來る時、ニイチエの如き荒々しい攻撃と主張とは極めて當然に見える。リップスの所説が、論理的整齊を持つてゐる故に、ニイチエのごとく過激でないと思ふのは確かに間違ひである。ニイチエを過激と呼ぶならば、リップスをも過激と呼ばねばなるまい。(總て眞に道德的なものはいつの世にも過激と呼ばれる。)リップスは唯物的外面的に現代を支配してゐるあらゆる價値を人間の價値の内から放逐した。現代に所謂名譽、富、權力、地位などは、人間の價値を寸毫と雖高めはしない。民族的發展、愛國的努力、——これらのものが人格的威嚴を眼目としない限り、それは生の没落への努力である。國民の偉大はたゞ各個人の道德的優秀によつてのみ獲得せられる。(もとよりこの優秀は何人にも惡を爲さず何人をも害はず、その行爲に於て個人と社會との平和を擾さぬといふ如き徳を意味するものでない。此の如き徳は多くの場合精神上道德上

の死である。こゝに云ふ優秀は各個人の道義的な力、自己より發する活動、自敬を求むる努力、男らしさ、自己の所信を負ふ誇り、何物の前にも屈せざる眞實、矮小と卑賤とに對する憤怒などを意味する。)

さて人格價値の力説が當然引き起すべき問題は、各々の人格の間の高下の階段である。これはニイチエにとつて最も重大な問題で、又彼の多くの言説の出發點であつた。しかしリップスは高級なる人格と低級なる人格のある事實を指摘し、自ら高くならうとする努力が道德的に必須である事を説くに止めた。こゝに二人の(あまり重大でない、同時に重大な)相違が見出される。リップスは總て自發的でないものを卑しめる故に、一人が他の人を支配することをも忌み、又他の意志に屈從する奴隸根性を不道德と呼ぶ。ニイチエはかくの如き不道德な(しかし現代に於ては道德的だとして賞讃せられる所の)多くの奴隸人を、如何に處置しなければならぬかに就て心を悩めた。さうして人格的階段の確立と下賤なる者(その或者は貴族と

さへ呼ばれてゐる)に對する不斷の戦ひによつて、生活を頽廢より救ひ、超人の産出——即ち眞に高貴なる道德的完人、「人」そのものの實現——のために盡さうとした。この意圖に對してはリップスも亦反對の餘地がない。

こゝで私は第三の類似——道德的氣分の相似——に移る。それは一言にして云へば峻嚴である。頽廢者に對する憎惡、鍛鍊の必要、——道義の熔爐の内に自己を投げ入れ、客觀的な考察と評價の鐵鎚(ニイチェによれば人間の運命超人の産出を顧慮する超個人的考察と評價の鐵鎚)を以て鍛鍊し、曾て何人も聞かなかつたほど朗かな哄笑を笑ひ得るに至ること。そこには弱々しい感傷、徒らに縦いまゝな享樂、物質的な和平安全、精神的な怠惰、「長くなつて寝そべること」などは一切許されない。

しかし二人の峻嚴は、息の詰まるやうに窮屈な束縛を強ひようとするのでない。生活の強剛化によつて眞に價ある快樂を産まうとするのである。内面の豊富と廣濶

との感情、潑刺たる力の感情、内面的一致と自由との感情、——これらの感情要素の綜合としての精神的並びに道德的強健の感情、充ち渡れる道德的自我感情、即ち充ち渡れる世界と人類との感情、——これが峻嚴なる訓練によつて目指される快活な自由の境地である。

二 リッブスの個人主義

個人主義は今不評判である。しかし眞に個人主義の何であるかを理會したものが、個人主義を呪ひ得るであらうか。若しくは眞に道德の何であるかを理會した者が、個人を尊重せずにもられるだらうか。

個人主義は主觀主義と同義でない。しかしまた冷淡、無情熱、無心情などの同義語としての「客觀的」をも排斥する。この點に就てリッブスが云ふには、——我らの直接に經驗し得るものは自己のみである。我らが對象を經驗するのも對象に於て自己を經驗するに過ぎない。従つて如何なるものの價值も、畢竟自己の内に起る價值感情に他ならぬ。併し此の如き主觀的價值のほかに、物象そのものには、その本性上要求する所の價值がある。もし我々が物象に内具する一切の性質を完全に自己

の内に現前せしめ自己の中に作用せしむるならば、我々は物象の客觀的價值と全然相應する價值感情を經驗し得るだらう。即ち客觀的價值は、我々にとつては主觀的評價が最も深く完全に行はれる時明かにされるものである。——かくの如きことは團體的に行はれ得べきでない。たゞ個人的にのみ可能である。さうして個人的に自己を深く高く築くことは、偏狹、淺薄などの相反として、最も客觀性に近く迫り得る道なのである。

個人主義はまた主我主義（利己主義）と混同されてはならない。リッブスが明瞭に指摘した通り、利己主義と利他主義は物的價值の實現に關するものである。個人主義者は之に反して嚴密に人格價值の實現を意欲する。人が自己の人格に絶対の權威を認める事を外にしては、個人主義は無意義である。併しリッブスがくれぐれも注意した通り、自己の人格を尊重する權利は同時に他の人格を尊重する義務を伴つてゐる。これは他から投げ與へられた權利義務ではなくて、我らの心理的事實に基

く價值感情の發露である。我らは自己の自發的な精神活動に於て、自己活動と精神全體との一致に於て、自我價值感情を経験する。さうしてこれを得んがためには全然他人を顧慮することなく行動する。併しまた我らは感情移入によつて我らの内面的活動方式と人格の本質とを他人の内にも發見する。従つて我らは他人の魂が如何に動くか、他人の魂が本來如何なる性質を有するかを見る時、自分自身の内面的活動方式と人格的性質とに對する時と等しく、價值又は無價値の感情を経験せずにはゐられない。かくの如き同情的な人格價值感情に支配せられてゐる時には、他人の人格も自己の人格と同様に取扱ふ。このことは他の人格の内に「這入つて考へる」ことの（人間通となることの）深さに従つて益々鮮かになるのである。——眞正なる個人主義者にして、物質的生存競争に没頭する利己主義の卑しさを憎まないものはない。また人間のこゝろに對する偏狹と盲目を尙んで、出来るだけ人生の内に孤立することを徹底的だとする馬鹿者もない。

個人主義が此の如きものであるならば、必ずしも「個人」といふ語に重きを置く要はない、といふ人があるかも知れぬ。（實際人格主義と云つた方が一層特徴を云ひ表すに近い。）しかし現在、道德原理として民族主義が唱道せられるのを見ては、なほ個人主義を大聲に叫ぶ必要が感じられるのである。個人主義を利己主義と間違へる人たちには、人格價値の尊重を説けば好いが、「民族」を高調する人たちには、あくまでも個人の意義を説かねばならぬ。リップスは云ふ——祖國とは、民族とは、國民とは何ぞや。要するにそれは此等のものを構成する各個人に外ならない。財寶や制度や設備とは唯人にとつてのみ價値あるものなるが故に、人を除外すれば總て空語である。更に國民の偉大とは何ぞや。外面的權方や富や聲譽は國民の所有する福利であつて國民そのものではない。故にこれ等のものの偉大は國民の偉大を成すことが出来ない。國民の偉大は各個人の偉大である。權力や富や聲譽が人格の偉大に代はる時、そこには唯没落があるだらう。——更にリップスは云ふ、——今日多

くの人の所謂愛國とは何ぞや。真正の愛國を知る少數者を除いては、そこには唯物質的福利への追求と屈従があるのみである。外面的榮華に眩惑されたる群集と共に萬歳を叫ぶ者が愛國者とせられ、傳統と權力との前に自己の所信を屈せざる者が賣國者と名づけられる。如何に多くの匍匐と屈従と、所信の隠蔽と不信實と、無威嚴と奴隸根性とが愛國心と自稱して威張つてゐることだらう。さうして權勢を禮拜したり、權勢の所有者に神に等しき名譽を與へたり、甚だしきはその死後にさへ一種特製の「冥福」を與へるといふやうな、神の冒瀆が如何に無恥に行はれてゐるだらう。——かくの如きリップスの主張は不穩であるか。これを不穩と斷じ得るほど我らの社會と國家は完全に活動してゐるか。さうして所謂「民族」なるものが、個人の自己活動以上に具體的統一的な生活内容を以て、物的價值以外の價值を實現するために努力してゐるところを、指し示すことが出来るか。

もとより個人の尊重は國家或は家族といふ如き社會的有機體を否定することにな

るのでない。我々が道德的終極目的を最大限に於て實現するためには、社會的有機體は必須なものである。たゞ併し、社會的有機體の意義は、總ての個人がその天稟と地位とに従つて、最も自己に適する目的の實現を分擔し、その共働によつて全體の道德的使命を實現しようとする所のみあるのである。自由なる人格の發展、道德的理想の最大限の實現、これを外にしては國家と雖も遂に無目的である。

三 リップスの警告

真正の個人主義思想は我らの眼前に横流する奴隷根性への警告とならずにはゐない。

奴隷根性は不道德である。自己の人格価値より出でて自律的に働かない故に不道德である。しかも或種の人々は、「人」であり自己であることを止めて、器械に墮し去らうとしてゐる。

我らは道德的要求に對して服従することが出来るが、しかしそれは他の意志に屈従するのではない。その要求が我らの内にある道德的要求と對應する時、我らは内より出でてその要求を充たすのである。もし内心の不服を抑へて表面上服従するな

らば、若しくは内心の響應を度外して盲目的に服従するならば、それは奴隷根性として不道德である。

盲目的服従に人を導く事物に就てリップスはかう數へてゐる、——人間の生命力を八面に發展せしむる事を妨げ、若しくは最良の生命力を腐敗するに任ずる肉體上精神上榮養不良。あらゆる種類の軟化、感情耽溺、思想的散亂。精神的麻醉劑（あらゆる種類の不健全な浪漫主義神秘主義象徵主義）に於ける漂泊と遊宴と微睡。——さうしてリップスは卑近なる一例として人を昏睡せしめ自己活動を萎靡せしむる酒精の妄用を擧げた。

しかし更に悪いのは誤れる教育である。リップスはそれを惡魔的と呼び、人間の所有欲と權勢欲とが、自家の目的のために故意に他人の精神を昏睡せしめ兼ねないと云ふ。

誤れる教育とは、質問を遮斷し疑惑を禁止して或思想と信仰を強ふることである。

或は言語教授の過重によつて人格と思想と昏睡せしむることである。或は慣習や外面的行爲や儀式などに遲鈍に無思慮に慣れしむることである。かくして人は無抵抗に或種の印象に引ずり廻され、他人の爲めの盲目な器械となる。

更に悪いのは、或福利のためにする利己的服従である。こゝでは自己の心情が第二義のこととして斥けられ、利害賞罰が第一義に彼を支配する。道德とは彼にとつては怜悯なる商賣である。此種の人は最も多いが、しかし道德的には最も卑しい。現代の政治組織經濟組織がかくの如き奴隷根性を産出し獎勵する限り、この卑しさは益々盛んになるだらう。

二

かく見れば問題は何時も物質的功利的打算の驅逐、人格の威嚴と崇高とに對する情熱の喚起に歸著するやうである。しかしかういふ叫聲は非現實的な空想に基くものとして一般に軽く聞き流される運命を持つてゐる。それは何故であるか。リップ

スによれば、現代が心情の唯物主義に支配せられてゐるからである。さうしてこの主義を有効に遂行する方便として、あらゆる形に於て自敬を犠牲にするところの成功主義が、自己に忠なる者を馬鹿として社會から放逐し得るほど、力強い勢力を得てゐるからである。

生の價値が外面的榮華になくて精神全體の統一的活動にあることを最も好く知つてゐる筈の文藝家さへも、今はもう頼みにならない。富を持ち勳位を持ち追隨者を持つ人が、その持つ所の物の權威によつて自分を他人よりも善いと思ひ込むやうに、文藝家もまたその小さい名聲と讚美者とを持つことによつて、自己價値の幻影を造り、之を真正の價値と妄想する。しかし自ら持つ所のものは自らある所のものでない。彼らは既に失はれてゐる。

こゝにリップスの力説する所がある。——真正の名譽はたゞ我らの眞に所有するもの、即ち我らの人格の高さでなければならぬ。他人の尊敬はこの名譽を寸毫も

増減しないのである。しかし不透明な弱者は他人の尊敬を以て己れの乏しき名譽に（即ち人格の低さに）代へ、自欺の作用によつて自らを高く偉大に感ずる。従つて彼らは自ら尊敬名聞追従阿諛の網を張り、廉價に所謂「名譽」を得ようとする。或者は尊大に振舞つて他人の尊敬を詐取し、或者は互に尊敬を融通して相欺き合ふ。それほど彼らは自信と自敬を缺いてゐるのである。

我文藝家の多くも亦かくの如き種類の弱者である。

三

リップスは美學者として文藝家及其の受用者に多くの事を教へる。しかし倫理學者としては更に一層重大なことを彼らに教へる。——「人」となることを。あらゆる意味の道德から放たれることによつて藝術が自由になり高くなると考へる人々は、藝術の熱愛者たるリップスから左の語を聞いて驚くだらう。——藝術の眞正なる内容は常に人格的生命である。我らは藝術品の（一般に美の）享樂によつて、多かれ

少かれ本質の根柢を攫まれ全人格を生かされることを感ずる。同時に我らは自己以上高められてゐる。我らが美なるもの及び藝術品の中に移入するのは日常現實の自己ではなくて、更に純粹な、更に廣濶な、更に高い自己である。一切の美は少なくとも觀照の瞬間に於て我らを一層善き、一層十分な——従つて一層道德的な人間にする。あらゆる藝術品はこの使命を充さなければならぬ。あらゆる藝術家はこの使命を果す限りに於て藝術家である。

もしこの語を聞いて驚くものがあるとするれば、それは既に頹廢しかゝつてゐるものである。しかし我文藝家の内には藝術の内には藝術の内に倨傲過度に藝術を禮拜するものがあまりに多い。リップスはこの點に就て更に教へる、——人は藝術の内容として善を描寫し若しくは體驗することによつて、道德上至高なるものを自己の中に體得した積りになつてはいけない。現實の世界に於て體驗し、更にそれを實行することは、一層善きことである。またそれにはより多き困難がありより強き人格の力を要する

故に、一層高きことである。優秀なる藝術家又は翫賞者と雖、この實踐的の力を缺いて藝術的空想の内に閉居する者は、偏狹、薄弱、盲目と呼ばれなければならぬ。道德的世界觀に代るものとして美的世界觀を求むる叫びは、内面的弛緩と解體と頽廢との表徴である。道德的使命を回避し、その嚴肅を胡魔化し、我らを軟弱に虚弱にする傾向ある限り、藝術は危険である。――

このことは學術及び學者に就ても同様に云はれてゐる。

藝術も學術も「人」を除いて考へれば無意義である。藝術家も學者も單なる藝術家學者たるに止まる限り唯人間の一片に過ぎない。この事實を悟ることは、さうして「人」として働き出すことは、彼らを頽廢の淵から救ひ上げるだらう。

四 「自然」を深めよ

—

我々の生活や作物が「不自然」であつてはならないことは、今更こゝに繰返へすまでもない。我々は絶対に「自然」に即かなくてはならぬ。しかしそれで「自然」に就ての問題が總て解決されたとは云へない。寧ろ、問題はそれから先にある。

一體どれが我々の生活のドン底の眞實なのか。どれを掴んだ時に我々は「自然」に即したと豪語する事が出来るのか。

自然主義は殻の固くなつた理想を打ち砕くことに成功した。しかし代りに與へられたものは、極めて常識的な平俗な、家常茶飯の「眞實」に過ぎなかつた。(例へば、人間の神を求める心とか人道的な良心とかいふものはあとからつけた白粉に過

ぎない。人間を赤裸々にすればそこには食欲、性欲、貪欲、名譽欲などがあるきりだ、と云ふ如き。かういふことは如何なる意味でも新発見ではない。昔から數知れぬ人々が腹のなかで心得てゐた。それを心得てゐないのは千人に一人か百人に一人の理想家や敬虔家だけであつた。現在でも勿論同様である。たゞ多くの人は露骨にそれを發表するのを好まない。(それだけ理想家敬虔家の情熱が根深い習俗として社會を支配してゐるのである。)——そこを自然主義は露骨で以て刺戟した。さうしてこの主義がいかにも重大な意義を持つてゐるらしい感じを世人に與へた。實際それは、偽善家の面皮を正直といふ小刀で剥いでやつた、といふ意味で、重大な意義を持つに違ひない。或はまた幻影に囚はれた理想家を現實に引きもどした、といふ意味で。——しかしそれは決して以前よりも深い眞實を捕へてくれたわけではなかつた。そのもたらした新事實を挙げれば、先づ自然科学の進歩、社會主義の勃興、一般人民の物質的享樂への權利の主張、徹底的な虛無主義の出現——藝術上に於て

は様式の單純化、日常生活の外形的な細部の描寫の成功などであるが、そこに著しい進歩があつたとは云つても、何もより深いものは實現されてゐない。

こゝに恐らく自然主義の薄弱な反動に過ぎない理由があるのである。十九世紀後半が生んだ偉大なものは、たとへ自然主義のいゝ影響をうけてゐたにしても、決して自然主義的な本質を持つては居なかつた。そこには常に自然主義以上のものがあつた。この事實は世界の精神潮流から非常に遅れてゐた最近の我國の文化に就ても、嚴密に檢察せられなくてはならない。——

そこで生活の「眞實」、人間の「自然」の問題である。我々はこの「眞實」、「自然」を描くと自稱する多くの作家を持つてゐる。しかし彼らも亦常識的な粗雑な眼を以て見た「自然」以上に何物も知らないではないか。彼等はたゞ「多くの場合」「多くの出來事」「多くの人間」を知つてゐる。或は外景、室内、容貌、表情などに關する詳細な注意や記憶を持つてゐる。これらも確かに一種の才能である。誰でもが彼等

のやうな観察と記憶とを持つことは出来ない。けれども多くを詳に見ることは直ちに「自然」を深く見ることにはならない。彼等の眼が鋭さを増さない限り、彼等の経験がいかに積み重ねられようとも、質は依然として變らないのである。こゝに私は「書き方」の上で益々精練と簡潔と圓熟とを加へて來た四五の作家を眼中に置いて考へて見よう。彼等は皆人生を底まで見きはめた様に振舞つてゐる。彼等はさまざまな社會現象を詳に巧妙に描寫する腕を持つてゐる。しかし彼等が社會の裏に住む無恥な女を描き、性慾の衝動に動く浮薄な男を描き、或は山國海邊、或は大都會小都會の風物情緒を描く時には、それがあらゆる階級の男女や東西南北の諸地方を材料とするに拘はらず、またそれ／＼の境遇や土地を各々その特性によつて描いてゐるに拘はらず、結局その作品の核をなすものは千篇一律に同じ觀察だといふ感じを與へるのである。彼等の眼は外形の特性をのみ見て、内部の特性を見得ない。彼等は活きた人生と自然から何時も同じ「自然」を見出す。かくの如きことは生の豊

富な活動を見得るものには全然あるわけがない。——しかも彼らはこの「自然」に満足して、それを解し得たことを誇つてゐる。その「自然」がいかに淺薄であるかに就ては殆んど省慮することなしに。

彼らは概念的であることを非常に嫌ふ。さうして彼ら自身の感じ方が既に概念的であることには氣附かない。

二

私はこゝで「自然」の語義を限定して置く必要を感じる。こゝに用ひる「自然」は「人生」と對立せしめた意味の、或は「精神」「文化」などに對立せしめた意味の、哲學的用語ではない。むしろ「生」と同義にさへ解せられる所の、(ロダンが好んで用ふる所の) 人生自然全體を包括した、我々の「對象の世界」の名である。(我々の省察の對象となる限り我々自身をも含んでゐる。)それは我々の感覺に訴へる總ての要素を含むと共に、またその奥に活躍してゐる「生」そのものをも含んでゐる。

例へば私がカサ／＼した枯芝生の上に仰臥して光明遍照の蒼空を見上げる。その蒼い、極度に新鮮な光と色との内に無限と永遠が現はれてゐる。さうして恰もその永遠の内から湧き出でたやうに、恰も光がそれを生んだやうに、私の頭の上には咲き綻びた梅の花が點々と輝いてゐる。本當に「笑つてゐる」といふ言葉がふさはしい様に……これが自然である。色と光と形、さうして私の心を充たす豊かな「生」。

——また例へば一人の青年が二人の老人を前に置いて、眼を光らせ、口のあたりの筋肉を痙攣させながら怒號する。老人はおど／＼してゐる。青年は自分の聲のきゝめを測量しながら、怒りの表情の抑揚のつけ方を一寸思案して見る。——これも自然である。聲、表情、さうして或目的のために老人の人格を壓迫してゐる青年の意志、感情、打算。我々は外形に現はれたものを感覺し、知覺すると共に、この外形を象徴として現はれて來る内部の生命を感得する。我々が自然を認識するのはこの兩様の意味を含んでゐる。即ち外形はそれと全然似よりのない、性質の違つたものを我々に認識させるのである。

三

ところでこの外形と全然異なつた内部生命を認識することは、いかにして可能であるか。例へば我々は或人の顔の筋肉が動くのを見て、その人の喜怒哀樂やまたそれ以上に複雑なさま／＼の心持思想などを感知する。我々の眼に映じたその微かな筋肉の動きと我々の感じたその内生とは、實際全く似よりのないものである。この二つは何故に直接に結びつくのか。

これは恐らく我々の「生」に相通するものがあるからである。我々はそれ以上に原因を知らない。たゞ事實として直接にこの「生」の融合交通のあることを經驗する。——しかし我々は、この際我々の感ずるものが嚴密に我々自身の感じであることを忘れてはならない。もとより我々は、それを自分の感情として經驗するのではなく、あくまでも對手の感情として、自意識を離れて感ずるのである。その焦點に

はたゞ相手の感情のみがあつて、自分はない。寧ろ自己が、その焦點に於て、相手の内に没入してゐるのである。けれどもいかに自分を離れた氣持になつてゐても、「自分」が「相手」になることは出来ない。相手の感情を感じながら、實はやはり自分自身の感情を感じてゐるに過ぎない。云はば自己を客觀化して感じてゐるのであつて、相手はたゞ、その自己客觀化を觸發するに留まるのである。——即ち我々は或外形を見た時に、その外形の意味として我々自身の感情を感じてゐる。さうしてそれをその對象の認識と呼んでゐる。

そこで問題は、その對象の生命にピタリと相應するやうな生命を自己の内に經驗し得るかどうかに歸著して來る。

感受性が鋭く、内生が豊富で、象徴を解する強い直覺力を豊かに獲得してゐるものはさまざまの對象の生命の動きを自己の内に深く感じ得るだらう。彼らは外に現はれたさまざまの現象を見るのみならず、その内部の生命に力強く没入し行く。彼

らの感ずるのは、或外形に現はれなければならなかつた内部の力の必然性である。内部の活動の複雑を極めた屈折濃淡である。——このことを高い程度に、(例へばロダンほどの程度に)實現し得るのは、なか／＼容易ではない。しかし我々はそれを目指して進まなくてはならない。この程度を高めることは、とりもなほさず「自然」を捕へる程度が深くなることである。我々はこの程度を高め得た時にのみ、「自然を見ること」を誇り得るだらう。

四

ところで内部に突き入らうとする衝動を感じない人たちは、(例へば前に云つた作家連の如き)極めて常識的な、普通一般の見方を以て人間の内部を片附けてしまふ。さうしてたゞ外部のさまざまの變化や状態にのみ注意を集中する。彼等の「自然に即け」といふ意味は、右の常識的な見方の埒外に出るなといふことに過ぎないのである。

で彼等の強味は、一般の常識が認容するところを振りかざすにある。例へば「かういふ人が實際あるのだ」、「かういふ事を現に自分も感じてゐる、多くの人も感じてゐる」、「それが或理想から見ても好ましくないことであらうとも、とにかく人間の自然なのだ、私はその自然を捕へた、」云々。

しかし自分の経験を本當に理解しようとする人が知つてゐるやうに、経験の真相を掴むといふことは極めて難かしい深い問題である。それはたゞ意識の表面に現はれるものを辿つて行つただけでは解らない。殊に「性慾の強い力」とか「生への執著」とかといふ概念を恰も生活の本質であるかの如くに考へ、總ての現象をそれへ引きつけて理解しようとするやうな場合には、恐らく生活が極めて狭い貧弱なものになつてしまふだらう。それでもその人には、「生活が實際さうである」やうに、「それが人間の自然である」やうに、思はれるに相違ない。さうしてそこに生活の小化醜化が行はれる。生活の豊富な真相は、空想として、或はこしらへものとして、

彼等の前に價值を失つてしまふ。彼等はこの小さい生活に満足して、生活の真相を實感しようとは努めない。

従つて彼等の眼には、常識以上に深く自然に喰ひ入つたものと、實感なくたゞ空想によつて造り上げられたものとの區別がつかない。そこには嘘と眞實との兩極端が現はれてゐるのに、彼等はそれを嗅ぎわける力を持たない。さうして自分たちよりも遙かに深く自然を掴んでゐるものに對して、自然に即けと忠告するのである。

總てこれらのことは彼等の内生の淺薄貧弱から生れてゐる。彼等の「自己」が淺薄である以上それを「客觀化」した彼等の経験が淺薄であるのは當然だからである。彼等の根本的な缺點を救ふものは、たゞ自己の深化の外にあり得ない。それによつて彼らはその「眼」を鋭くし、その経験の「質」を變化することが出来るだらう。さうして初めて本當に自然に面することも出来るだらう。

五

自然をたゞ醜惡に觀察して喜んでゐた作家たちが、近頃何となく認識論的な、或は倫理學的な思想を、その作品中に混するに至つたことは、新しい時代が彼らに及ぼした影響としてかなり我々の興味をひく。しかし彼らは、彼ら自身の思索が彼らの最も忌み嫌ふ概念的なものであることに氣附かない。従つて彼らの觀察と思想とは、まるで木に竹をついだやうに、彼らの作品中に混在してゐる。このやうなことは彼らの内生の幼稚を外にして解釋のしやうがない。彼らは「自己」を改革する代りに、二三の新しいことを自己にくつつけようとする。生れ變る代りに、竹べらで自分の顔の造作を造り變へようとする。あまりに他愛がない。

彼らは先づ、自分たちのとは違つた自然の見方を本當に心底から理解して見なくてはいけない。私は彼らが性慾を重んじるからいけないといふのではない。彼らが娼婦を描くからいけないといふのではない。たゞさういふものに對してもつと深い見方のあることを理解しろといふのである。我々の生活は穢ないものをもきれいな

ものをも包容してゐる。迷ひもすればまた火の様に強烈に燃え上ることもある。耽溺の欲望と共に努力の欲望もある。この内面の豊富な光景を深く理解した人の見方が、彼らの見方よりもいかに多くの高い價値を持つてゐるか、それを血によつて感じてもらひたいのである。彼らは多くの心境を理解し得ないが故に、排斥する。(我は彼らの心境を理解しつくした上で、淺薄として排斥する。)しかし理解すればとても頭があがらなくなるやうなものを、不理解の故に排斥するのは、彼ら自身にとつても寧ろ悲惨ではないか。私は思ひついたまゝにドストイェフスキイの例を引かう。この作家が人間の「自然」を最も深く見きはめた人の一人であることは、恐らく彼らの認容しない所であらう。彼らはたゞドストイェフスキイに變態心理の作家を見るに留まるだらう。彼が著しく「神」のことに執著する所などは殆んど無意味に感ぜられるに相違ない。しかし實際はこの作家ほど深く確實に人間のあらゆる性情を擱んでゐる者は、たぐひ稀れなのである。私はこゝに彼の擱んだ無數の眞實

を數へ上げることは出来ない。たゞ一つ、(特にそれが人間の自然でないと思へられてゐるらしく思はれるから)彼の洞察した「神を求むる心」或は「信じようとする意志」に就て少しく觀察して見よう。

「或者」を信じようとする意志は、人間の自然として、少なくとも性愛と同じ程度の根強さを以て我々の内に蟠まつてゐる。それは恐らく自己の人格を壓倒する力に對して畏服しないではゐられない衝動に基くものであらう。同時に又それは我々の内のかくの如き力を求める心に、(それがなくては空虚を感じる我々の弱い心に)基くものであらう。神はこの力の象徴であつた。神が滅ぼされた時には惡魔が代つて象徴となつた。象徴を嫌ふものは自己の奥底に「世界の根本實在」としてこの力を認めた。さうして全然この力を(いかなる形に於ても)認める事の出来ない者は、同じく自己を壓倒する力として虚無を信じた。——ドストイェフスキイの見破つたのは、この、人格の上に働く力の、深祕な活動である。同時にこの力を感じないで

はゐられない人間の微妙な心理である。彼はこの感受性に強い露西亞人の性情を、極めて明確に掴んだ。彼の「魅かれたる者」を讀む人は、露西亞人の心が恰も獲物を狙ふ鷲の如くこの力を狙つてゐるやうに感じるだらう。さうして露西亞になれば百のラスプーチンが現はれても不思議はないと思ふだらう。かくの如く信じようとする傾向の強い人民の内に、全然信すべきものを見失つた者が出るとすれば、それがいかに猛烈な虚無の信者となるかは、露西亞虚無黨の記録を讀む者が知つてゐる如く、極めて理解し易いことである。これも亦「魅かれたる者」の内に鮮かに描かれてゐる。(更にまたかくの如き人民の内から、神を信する者、惡魔を信する者、自己を信する者が出るとすれば、それがいかに驚異すべき聖者となり、陰險な惡黨となり、超人の夢想者となるかは、特に「カラマゾフ兄弟」の内に鮮かに描かれてゐる。)我々は「魅かれたる者」を讀んで、信じようとする心の暴威が決して性愛のそれに劣らないことを、本當に合點し得るのである。ニコライ、スタフロオギンが

自ら企てずして得た奇妙な天真の力は、恰も「無」の内に「總て」を見る禪の悟りのやうに、たくまず努めず自ら意識することもなくして、しかも彼に觸れる總ての人に異様な壓力を與へる。まるで人々の間に「狂氣」をふりまいて歩くやうに見える。幾人かの女が殺されさうにその心を捕へられてゐる。露西亞の神を信じようとする一人の青年は彼の内にその神の使徒を見る。狡猾と虚偽とを享樂するらしい一人の虚無主義者は、自らを彼の奴隸の如くに感じてゐる。彼を殺さうとした者は死の前に平然たる彼の態度によつて、心の底から覆へされた心持になる。これら總ては何によつて起るか。人格の上に働きかける力と、その力を感じる微妙な心理の他には何にもない。さうしてそこに信じようとする心の祕密がある。

——私はドストイェフスキイの擱んだ右のやうな眞實に對して、神を求める心が人間の自然でないと考へてゐる様な人々の眼の開くことを心から希望する。この眞實は露西亞にばかりあるのではない。我々の眼前に萬を以て數ふべき人々がそれでは現してゐる。それは少なくとも現實である。さうして眼を開いて見るものには、人間の自然である。

これはドストイェフスキイの眞實の内の唯一つに過ぎない。他の多くの眞實に就ても私は同じやうに警告を附けたいと思ふ。それほどに自然を説く人々の眼は自然に對してふさがつてゐるのである。

五 藝術批評

——批評家は自己存在を危くせざらんがために、自己の地歩を鮮明ならしめんがために、文學者藝術家が描く所の人物を虐待する必要に迫られる。……他を打ち倒すは自己を打ち立てる所以である。叱責の聲は遠くまで聞えるのが常である。……批評家はかくして理解よりも先づ自我の利己的擴大をやる。さうしてその自我を以て他人を制御せんことを欲する。……吾人今日の批評家は皆、作物から少しも快感を得ない、少しも感動されない、または自己の人格に觸れたものがないと云ふやうな事を豪語する時の微妙な愉快を心得てゐる。

——藝術品はまことに「死」に反抗する人間性の最高努力である。書物は如何に不完全でも、矢張り「永久に生きんとする意志」の表出である。此點に於てそは常

に尊敬を拂はれなければならぬ。かくてそは或時代の間、此一種名狀し難き、微かに深き或者、即ち人格の響を保有して、愛を解する者の胸に深く滲み込んで行くのである。……人間の思想は、生物の個性と同様、理解せられんがためには先づ愛せられんことを要求するからである。

——理想的の批評家は、藝術的作物によつて最も多くの觀念情緒を示唆せられ、且この情緒をば他に傳へ得る人間である。作物に對して最も所動的でない人である。最も多くのものを其處に發見し得る人である。言を換へて云へば、特に批評家と云はるべき人は、美なる者を最もよく讚美し、且又これを讚美することを最もよく他に教へ得る者である。

以上はギユイヨオの言葉であるが、私もまたその通りに感じてゐる。

しかし私は或藝術の批評を書かうとする際に、自分の興味が「讚美」よりも「非難」の方に向いてゐることを發見することが少くない。さうしてそれを抑へよう

と努めるに拘はらず、抑へきることの出来ない場合も多い。

私はギョイヨオの云ふ批評家のやうに他人の作品から醜い部分を見出して喜ぶのではない。たゞ所謂ジャアナリストの氣質を持つた一部の藝術家の態度について、抑へ難き憤激を感じるだけなのである。さうしてこの低級な、恥づべき精神的墮落が、何らか深い意義を持つやうに考へられてゐる現前の不正を、攻撃しないではゐられない氣持になるのである。私はこの攻撃によつて眞に藝術家の本能を有して將に生涯の仕事の緒を開かうとしてゐる誠實な人々の努力を、より明かに際立たしめんとする他に他意を持たない。愛に充ちた理想的な批評家と雖、明瞭な害毒の多い不正に對しては、その烈しい非難を控へることが出来ないだらう。愛の狭い私でも、明かに不正だと信ずるものに對しては、忌憚なき非難を差控へる必要のないことを感じる。私の攻撃が理解なき利己的漫罵であるかどうかは、たゞ私の言説が決定して呉れるだらう。

理想的の批評家は美なるものを讚美することを最もよく知つてゐる。と同時に醜悪なるものに對してまた最も敏感である。

六 競 争

現代の著しい特徴の一つとして、我々は淺薄に刺戟的な廣告術を擧げることが出来る。それは政治經濟思想文藝のあらゆる方面に現はれた生存競争の徴候である。しかし思想文藝の關する範圍に於て競争とは何を意味するか。

我々が人類の文化、或はそれを支持する個人の性格内生などを眼中に置く時に、思想家藝術家などの「生存競争」とは果して何を意味するだらうか。彼等の任務は深く掘り高く築くことである。そのために彼等の生活は痛苦に充ちてゐる。しかし彼等は、何のために、誰と競争する必要があるだらう。彼等はたゞ自己の能力の極限を以て自己の製作を産めば好い。他人が傑作を作るとは彼の活動の障礙とはならない。彼等が傑作を作るとも他を害する筈はない。彼等は相共に歡び刺戟し力

づけるべきである。

しかし事實はさうは行かない。我々はなほ競争心を超越し得るほどの人格の自由を獲得してゐない。より高くならうとする意志を持つものは、他人の向上の努力に就ても極めて敏感である。何等利害關係のない場合にも、常に負けまいとする氣が働いてゐる。たゞ、この競争心をして單に自己に對する刺戟に留まらしめるか、或は故意は對抗的手段を取つて他人を凌駕しまたは他人を引下すか、こゝに態度の分岐點があるのである。前者は競争心によつて中核を動かされるのを恥ぢる。後者は競争心を働かせて常に反感に動く。

藝文界の生存競争として我らの眼に觸れるものは、後者によつて起される諸種の運動である。私はこゝに主として、糊口のために、或は名譽欲のために、或は權力のために、或は黄金のために、製作をば單なる手段、職業とする所の藝術家思想家を見る。彼等に於ては製作欲の自己目的性は病み衰へてゐる。彼等の製作は單なる

商品である。彼等の才能は單なる技巧である。彼等はその製作の需要と相場を高めるために阿諛と奇矯と廣告とを辭せない。私はその最も著しい現象を秋の繪畫展覽會に見る。畫家の或者はたゞ單に人氣のために、即ち衆目を驚かせ衆人に媚びて生活の保證を得るために、製作をしてゐる。彼等の努力の焦點は、化粧品商と何ら擇ぶ所がない。未來ある幾許かの青年畫家すらも、純粹な藝術家本能によつて一二の價値ある作品を製作し得た後に、或はその前に、人氣への焦燥によつて何時の間にか化粧品商の本能を獲得しその奴隸に墮し去らうとしてゐるのである。

文壇に於ても、たゞそれが一時に展覽せられないだけで、事實に變りはない。嘗て「文壇に生きんとする努力」と云ふ言葉が、何らの反對もなく通用したほど、或種の人々は文藝を人氣商賣視する。彼等は何故に「永遠に生きんとする努力」と云はないのか。それは彼等に永遠への情熱がないからである。彼等にとつては、生活は墮勢に過ぎない、理想は空語に過ぎない。さうして藝術と思想とは、女の肌から

得る一時の官能の歡びにだも如かない。

我々はこれらの思想家藝術家が眞に生きてゐないことを知つてゐる。彼等は自己の製作の深さ大いさをそれ自身に就て考へる代りに、他の誰々よりも如何なる點で優つてゐるか、如何なる點で人氣を集め得るか、に就てのみ腐心するのである。従つて彼らの製作は、内にそれ自身の價値を持たうとするよりも、外に群集によつて定められた價値を獲得しようとする。たとへ自己の弱點に氣附いても、それを鍛錬しようとする努力には目も呉れずに、反つてそれを利用することに全力を傾ける。かくて彼等の努力は、群集の奴隸となるといふ一事に盡きてゐる。

かくの如き人々の生活と製作とが、いかなる意味に於ても群集の興味をそゝり注意を刺戟しようとする企圖されてゐることは、何の不思議でもないかも知れぬ。しかしそのために我々の文化が如何に汚され害せられるかを思へば、輕々しく看過すべき問題でもあるまいと思ふ。

七 告白と廣告

或二三の自然主義者は告白した。――

- (一) 自分は本來平凡淺薄な人間である。
- (二) 自分がこれまで現代生活の諸問題に就て主張し解決しようとしたのは、總て文壇の流行を造るための、或は流行に遅れないための、方便に過ぎなかつた。従つて毒にも藥にもならぬ安物を賣り擴めるために、様々の廣告法を工夫してゐた。その方法は主として、自分が非凡異常拔群傑出天才的と云ふ如き一般と異つた者であるらしい不正直な言行をすることであつた。
- (三) 自分はこれを悔いて平凡な生地のままに生きようと思ふ。そこに最も正直な、最も人間的な生活がある。それこそ眞實の生活である。

そこで彼等は「平凡」にして「素朴」な田舎人の生活を、或は「平凡」な人間自然の情緒を讚美し始めた。「平凡ではあるが、しかし力強い生活の前をゆつたりと歩みつゝある人々の情愛の世界」を讚美し始めた。

彼等の或者に云はせると、正直である唯一の道は、「平凡なる自我」を全部露出させることである。

私は右の如き告白と主張との内に、再び彼等の廣告法の新工夫を見出す。彼等は眞に非凡ならんと努力する人々の誠實にして熱烈な情熱に壓倒された。しかし彼等はこの敗北を正面から受容する代りに、敗北を利用して新たに喝采を博しようとする。こゝに卑しい狡猾な、陰謀者の本能を感ずるのは間違つてゐるか。

(一) 彼等が自らを平凡淺薄なりとするのは、勿論内面的の意味である。彼等は自己の性格才能情熱理想、或はその心理觀察眼、物の見方、感じ方、體驗の仕方、などに於て、萬人よりも一步も優れてゐないことを認めたのである。もとより彼等

は、その外面的生活に於ては、最初より何等非凡な所がなかつた。彼等の衣食住も、社會的活動も、これを職工車掌車夫漁師農人などの生活に比べて見れば、寧ろ平均線以下に平凡であつた。また彼等はこれ等の點に就て非凡を装つたこともなかつた。従つて今更主張せらるゝ平凡淺薄が外的の意味でないことは明かである。しかし彼等は眞に自己の内生が平凡淺薄であることを理解してゐるであらうか。彼等はたゞ説く所の思想を變へた。若しくはその住所を移轉した。しかし彼等の態度は依然として同一である。彼等は自己の思想藝術を誇つた時と全然同じやうに、所謂「平凡」なる自己を以て、衆人に説き、興へ、さうして衆人を動かさうとしてゐる。これが自己を碎かれた人の態度であらうか。内生に於て衆人より一步も優れてゐないと信する人の態度であらうか。自己を打碎かれた後宗教的な愛によつて心を充たされた人ならば兎に角、彼等はたゞ自己を打碎かれたと稱して、田舎人の生活に憧憬しつゝあるのである。彼等はこの境地に於てもなほ人を説く勇氣を、一體何處から得て

來たのか。——私は竟に、自己を平凡なりとする悟りを産んだ具體的體驗を、彼等の内に認め得なかつた。

(二) 彼等は在來の卑しい行爲を告白した。しかし私はそこに悔い改めた人の慚愧を見ることが出来ない。彼等の道德感は、警官の前に醜行を告白する詐欺常習犯人の如く鈍い。然らば何故に告白したのか。内より迫る道德感の壓力を外にして、何が人を告白せしめるだらう。利害關係か。無恥なる暴露欲か。——私はこゝにも內的必然性の缺乏を見る。

(三) 彼等は「平凡」と「純一なる人間的情緒の世界、その内に確乎として歩みつゝある力強い生活」とを直ちに結びつけた。こゝに彼等の無意識的な狡智がある。彼等は後者を前者に結びつけることによつて、前者に大きい價値を賦與せんとするのである。何故なら純一なる人間的情緒の世界やその内に歩む力強い生活は、決して平凡淺薄であり得ない。かくの如き生活を生きる人は、たとへ農夫であらうと職

工であらうと、現代に於ては實に偉大だと云はなくてはならぬ。(彼等の外的生活が平凡に見えるると云ふ理由で、彼等を平凡と呼ぶことの出来ないのは、(一)によつて明かである。)即ち彼等は「平凡」と云ふ言葉の狡猾なる使用法によつて、「平凡」なる彼ら自身を非凡なる人々の上に置かうと企てたのである。

彼等は平凡なる一般民衆の生活が彼等の理想とする境地に既に到達してゐることを恰も自明の理であるかの如くに、前提として許してゐる。もとより純朴な田舎人の生活は都會人の生活よりも遙かに人間的でありまた高潔である。しかし田舎の生活にも常に小さい競争と不徳と不安と葛藤とが絶えない。さうして彼等の多くはその生活が地獄であることを嘆き、純朴を失つた都會人をさへも羨んでゐる。彼等の内に純一な人間的情緒の閃めく機會は、都會人に比して遙かに多いけれども、その生活は彼等自身にとつては決して分裂のないものではない。土に親しみ自然と抱き合ふ彼等の生活を詩人は讚へるが、彼等自身はその内にたゞ自然との苦闘を感じる

ばかりである。これを恰も理想の生活の如く説き立てる呑氣な傍觀者は、寧ろ冷徹な人間と呼ばれるべきだらう。

純一な人間的情緒の世界を生くる爲めには、最も力強い人格の鍛錬が必要である。人は彈機が元に還るやうにその生活に歸することは出来ない。自我の主張、自我の解放その他現代生活が必然に引起した諸問題を、たゞ思索の領野より放逐することによつて、直ちに純一なる人間的生活に入り得るとするのは、あまりにこれらの問題の必然性に對する理解が缺けて過ぎてゐる。何故生活の分裂、欲望の混亂が起らなければならなかつたのか。何故自我固執によつて生活の統一に努めなければならなかつたのか。さうしてこの統一が成功しなかつた時に、何故大なる愛の必要が感じられなければならなくなつたのか。——これ總て生活が高められ強められなくてはならなかつたからである。眞の生活が向上の一路に外ならなかつたからである。しかし元に還ることを以て安んじ得る者は、平凡に安んじて向上の熱欲なき者は、恐ら

く右の如き必然の要求を内に感じなかつたであらう。然らば彼等の欲する愛の生活とは何であるか。人間味とは何であるか。彼等は一般に認められてゐる「情愛」を指さし、男女親子隣人などの間の愛著の生活を指さす。さうして現代生活の渦中に引き入れられた者は、この貴い人間味を失ふのだと云ふ。然らば現代生活をさへ脱離すれば、そこに何ら葛藤のない愛の生活が實現せられるのか。然り、そこに人間的情緒の世界とその内を踏みしめて歩く力強い生活とがある、と彼等は答へる。しかしそれでは現代生活の内容は何處にあるのだらう。情愛や愛著がなくて、現代生活の諸問題はどこから起るだらう。我々が切に純一なる愛の生活を望むのは、人間性質の内の愛の欲求と自我の主張との抗立が、強められ高められたからではないのか。これまで妥協してゐたものが「あれかこれか」の絶壁まで連れて行かれたからではないのか。我々は現代生活の内を突進して、分裂を征服し、エゴイズムを焼きつくし、その後初めて力強い統一に、純一なる愛の生活に到達することが出来るだらう。

私は平凡に安んじ元に還る人の「純一なる愛の生活」を信ずることが出来ない。

もとより人間は、平凡非凡を問はず情愛を持つてゐる。たゞそれが不純であり断片的であり氣儘であるのみである。これをその儘謳歌するならば、最早何等の問題も起らないだらう。しかし我々は人格を愛の熔爐に入れて、精錬されたる愛の生活を得ようと焦慮する故に、さまざまの痛苦と努力に堪へなければならぬのである。

告白者の一人は、自己の凡根を振りかざしながらも、自己の個人的愛を誇り、その永き忍耐と苦行とによつて眞の愛の學ばれることを説いてゐる。さうしてこの苦行すらろくに出来ない者に、何で人間らしい愛が解らうぞと威張つてゐる。我々にはこの苦行がまだ十分に出来ない。平凡でない多くの人々にもなほそれは出来てゐない。しかし凡根を振りかざす告白者は、既に衆に超えて眞の愛を知つてゐる。自己の平凡を悟つてから後に長足の進歩をしたのか。或は自己の平凡を悟るほど非凡

であつたのか。いづれにしても既に彼の告白の事實は消滅したわけである。さうして再び非凡なる愛の思想家として我々の上に臨むわけである。(今でなくてもやがてその内かう云ふことになるのだらう。)

また告白者の或者は現代生活の烈しい生存競争と空しい慌しさを聲限りに呪つてゐる。彼等は表面に争闘を忌んで、平和な愛の生活を憧憬するが、しかしそこには眞に愛に生きようとする宗教的決意なく、たゞ傷いた競争心の感傷的な泣言のみがある。彼等自身はしつけの悪い子供のやうに振舞ひながら、他人からは聖者の愛の如き大きい愛を要求する。しかも彼等はこの卑しい乞食のやうな振舞で、力強い生の前に逡巡する者、強い意志の缺乏によつて生を呪はうとする者の、弱々しい感情に媚びるのである。さうして自分の虚飾に充ちた過去の迷妄を悔いることによつて、雄々しく誠實に戦ふ人々の生活を非人間的として斥けるのである。

八 三つの視點

ある作品を批評的に見るには、大體三つの視點をきめて掛らねばならぬと思ふ。

第一は作者が対象の生命を、性格心理情緒などの本當の働き方を、いかに鋭く見貫いてゐるか、いかにハッキリと擱んでゐるか、といふ點である。

第二は作者がその対象を如何なる態度で取扱つてゐるか、作者の同情がいかなる方面に如何なる強さで働いてゐるか、或はどんな要求の眼で対象を見まもつてゐるか、といふ點である。

第三は作者がいかにそれを描いてゐるかに關してゐる。急所々々を突込んでゐるかどうか。作者の生のリズムをハッキリ響かしてゐるかどうか。誇張がはいつては

ゐないか。筆が遊んではゐないか。など。

もとよりこれは相互に密接に關聯してゐる事で、全然離して考へらるべき性質のものではない。たゞ焦點を變へて同じ物を幾度も見なほさうとするだけである。

二

この際「描かるゝもの」と「描き方」とを區別するならば、第一第二は前者に、第三は後者に屬する。前者は内容である。後者は形式である。形式はたゞ出来るだけ純粹完全に内容を描き出す外任務を持つてゐない。併し同時にそれは内容を殺すか活かすかの重任であらねばならぬ。

三

文藝の眞正な内容は人格的生命である。作者は自己の人格的生命以外の何物をも作物の内容とする事が出来ない。

人は自己の事實のみならず、他人の事實、社會の現象などを描く事が出来る。し

かしいかなる場合にもそれは彼自身の體驗である。彼は他人の悲しみ喜ぶのを、他人が悲しみ喜ぶとして經驗し、他人のこととしてそれを描く。併しそこに經驗されたのは客觀化された自己であつて、他人そのものではない。彼は他人の感情に於て、他人の感情として、自己の感情を經驗してゐるのである。

それ故人は如何に自分以外の事を描かうとしても自分を出る事は出来ない。

四

藝術品の價值は何によつてきまるか。云ふまでもなくそこに描き出された内容の高さ、大きさ、深さ、完全さによつてきまるのである。(技巧の巧拙はたゞ内容に奉仕する度合に於て價值に關與し得るに過ぎぬ。)

即ち藝術品の價值は、主として作者の人格的生命の高さ、大きさ、深さ、完全さによつてきまらねばならぬ。

これは極めて見易い道理である。人格的生命の豊富でないものが生命に充ちた作

品を造り得るわけではない。また自己の人格的生命の深くないものが、自他人間の心理を深く掴み得る筈もない。等しい深さにはいつたもののみが等しい深さを解し得る。

作者がもし更に價值高き作品を造らうと思ふならば、彼は自己の人格生命を更に豊富に偉大にするよりほか道はないのである。

五

しかしさういふ目的で人格的生命を高めようとして高められるものだらうか。

勿論それは全然不可能ではない。人は異境に放浪することによつて、さまざまな心持、人情、風俗などを知り、自己を豊富にすることも出来る。また女の心と體とを漁りまはることによつて、さまざまな情趣、感情を経験し、人間がいかにか女の美を享樂し得るものであるかを奥底から經驗することも出来るだらう。これらのことは或は最も容易であるかも知れない。併しこのやうな實驗のために、自己の人格内

の不秩序を醸さない人は幾人あるだらう。人は享樂を追ふに切にしてより高きさまざまな精神的要求を萎靡させる。彼はその生活の一面を豊富にする事によつて、生活全體を歪いびつにし反つて人格的生命を低下させるに至るのである。

人格的生命の真正な向上は、必ず内より迫るものでなくてはならない。この場合向上はそれ自身に目的である。人はたゞ必然に内より迫るものに聽従するのであつて、或他の目的（例へば製作、名譽、人望など）のために自己を高めようと思ふのではない。彼は最も正直に自己内奥の聲に耳を傾け、その内のどの聲に對しても「聞かぬふり」をすることなく、最も赤裸々に人間の自然に従ふのである。これは心理が複雑となればなるほど、人を苦しみの渦卷に追ひ入れる。生命の本性はより高い目標への努力である故に、人はこの努力から逃げ出すことが出来ない。しかも自己の内のさまざまの欲求や性質は、或は直接に努力を妨げ、或は相互の衝突によつて努力を困難にする。畢竟人は本性に従つて生くれば生くるほどひどく苦しむな

くてはならないのである。さうして苦しみの中に向上しなくてはならないのである。内に或目標への努力なく、従つて問題なく障礙なく苦しみなき人は、「人格的生命の昂揚」といふ言葉を極めて空虚に聞くだらう。時には馬鹿々々しいと思ふだらう。生命の稀薄な者凝滞せる者は容易に自己の立場に安んじ得る故に、また眞に生きつゝある者の不安な苦しい生活を容易に見下し得るのである。さうして自己の享樂とその對象とに就ての他は決して心を苦しめないのである。

私の眼には今文壇の表面に立つてゐる作家の十中七八迄が眞底から自己のいのちを築かうとしてゐる人でないやうに見える。従つて私は彼らから今以上に価値ある作品を期待してゐない。

さう思へば思ふほど私は、今芽をふいたばかりの少數な併し眞正な藝術家を心から祝福したくなる。さうしてその希望に充ちた、しかし何となく心もとない前途のために、不撓の勇猛心と衰ふることなき貫徹の力とを祈らないではゐられない。

六

右のやうに人格的生活如何に基いて起る作品の価値の高下を、私は具體的に、最初に擧げた三つの標準に従つて論じようと思ふ。

或人々、特に自然主義運動の中心であつた人々は、「事實を描いた」といふ理由でかなり大きな価値を自分達の作品に見出さうとしてゐる。併し彼等はその「事實の深さ」を「事實の詳しさ」と混同して考へてゐる。さうして自然科学者のやうに、極めて常識的な見方を絶對的な確かさに於て信じようとしてゐる。この點に就て先づ事實を見る眼の深淺銳鈍が問題にされなければならない。

抑、人間の心の眞實な状態はどんなものであるか、それはたゞ人間の心の隅々まで悉く理解した完全な「人間知者」にのみ解つてゐる。我々はたゞ心の或一面或一隅を見得るのみである。我々は完全な人間知者に近づく程度に於て眞實に近づき得るが、眞實そのものを掴むのは中々容易のことでない。我々が人生を見る眼の深淺

鋭鈍とは眞實に近づき得た程度を意味するに過ぎないのである。

併し人格的生命の恐るべき深さ複雑さに對する感じを缺く者は、容易に眼に見耳に聞くものを動きなき事實として信じ得る。彼らのいのちが或點に停止して進まないやうに、彼らの認識も更に突き入らうとする情熱を缺いてゐるのである。従つて彼らは人性の或事實を見た時に、それが更に深い無数の事實に制約されてゐる事を理解しないで、たゞそれだけで動きなき一つの事實として、人性の眞實を見得たやうな氣になる。彼らの重んずる所はその一つの事實を精密に觀察し得たかどうかであつて、その事實が生活全體の内にかかる位置を占めいかに制約されいかに影響するかといふ點は殆んど理解されない。實際また彼らには人格的生命の複雑な分裂と統一とはたらしきに全體として同感し得る能力もないのである。

もとより彼らの描く性慾や遊蕩や頹廢の心理は事實に相違ない。併しもし彼らがその人物の心理の或他の方面に十分な感情移入が出来たなら、其性慾や遊蕩や頹廢

は全然異つた色彩を帯び始めるかも知れない。もしこの方面が見落されてゐるとすればたとへ外的の事實に何の間違ひもないにしても、彼らの描いた事實は嘘である。彼らはその人物の心理の一面（遊蕩性慾頹廢など）にのみ自己没入をなし得たことが、とりもなほさず嘘を書く原因となつたのである。

右の如き嘘の例はいくらでも擧げることが出来る。最近二三の作家が私の熟知してゐる人間の生活を描いたに就ても、私は特にそれを感じた。一人の青年が或夫人と交際する。二年後にその青年が自殺する。作者はその青年の心理を自分の心理に引きつけて理解する。描かれた所は作者の淺薄な感情や體驗であつて、「自殺した青年」の生活では全然ない。その青年の戀愛も性慾生活も作者の描いたほど深入りしたものではなかつた。しかしその青年の内生活は作者の描いた所よりは遙かに烈しく深く複雑だつた。作者は勝手に手輕に戀愛と自殺とを結びつけて、安っぽい人間の生活を描いた。しかも作者は男女關係に就ての深い知者を以て自任してゐる。

——また強い性慾を持つた或青年がその性慾と苦闘しつゝ遂に病死する。或作者はそれを描いて性慾の不可抗の力を明かにしようとしてゐる。しかし何故この様な苦闘をしなければならなかつたかに就て深く同感することの出来なかつた作者は、その青年が「くだらない、生命のない觀念」に捕はれて、遂にその一生を誤まつたのを憐れむに留まつてゐる。彼の描いた青年は性慾生活に於て早熟であり、また壓抑するに困難な性慾の持主であるが、しかし別に異常といふ程でない。世間の遊蕩兒を目安にして云ふならば寧ろ極めて尋常な方である。また作者はこの青年を品性純潔氣象高邁、生れながらに敬虔な嚴肅な道德性の所有者と呼んでゐるが、彼はそれを實證する描寫を全然閑却して、反つてそれを裏切る描寫に力を盡してゐる。青年の苦闘はいのちのない無意義としか思はれない。この青年の眞の苦しみに同感し得ないこの作者が、如何に根本的にストリンダベルヒと異つてゐるかは、一目瞭然である。

尤も今の文壇では、たとへ明かな嘘を書いても、とにかく人生や自然の或一端を精密に見得た者が優れた作家だといふ事になつてゐる。それはいくらか本當であるが、併したゞ一端をのみ知る者は、全般に現はるべき人格的生命の貧弱を如何ともする事が出来ない。例へば自然描寫である。自然をその描寫の内に躍動させるためには、自然の内に生動するいのちに自己没入をなし得なくてはならない。これはその人の人格的生命の強烈の度に従つて起る事である。自然描寫も要するに自然に於て生くる自己生命の描寫である。従つて生命の貧弱な者は、いかに詳しく自然を描寫しても、結局空疎と貧弱とに了るのである。今自然描寫を得意とすると稱せられて居る二三の作家が、いかにも憐れむべき作品を發表してゐるかを見れば、この事は直ぐ明かになると思ふ。

七

以上は最初擧げた第一の視點から見たのであるがこれに對しては下のやうな抗議

が出るだらうと思ふ。第一、作者はその創造した世界に於て創造した人物を動かしてゐるのである。モデルと違ふなどと云つて貰ひたくない。第二、たとへ一面的でもその儘の事實があるのだから仕方がなからう。例へば遊蕩や頽廢の心理が或人間の生活全體であるやうな場合は、事實上少なくない。

第一の抗議に對しては、それだけの意味でならば一言もない。しかしその「創造した世界」が空虚で虚偽なのはお氣の毒だ、と附け加へて置く必要はある。

第二の抗議に對しては、私は前に説いた第二の焦點に日光を集めてその誤解を焼いて了はうと思ふ。

確かに人は歪いびつになつた人物や惡徳に充ちた生活を描く自由から閉め出されてはならない。しかしそれが人生の事實であるといふ事は、それだけでは何でもない。作者はたゞその材料を取扱ふ態度によつて、眞の藝術家の任務を果たし得るのである。またその作品の價値を獲得するのである。

云ひ換へれば、人は人格的生命のいかに劣弱な人物を描いてもかまはない。しかし作者自身は人格的生命の極めて豊富な人でなくてはならない。同情の行き互つた廣い深い心で取扱はれた時に、醜惡な人物事件の描寫は初めて價値を獲得するのである。もとより認識者は道德的偏見に縛られてゐてはいけない。いかに醜惡な事をも、恐ろしい事をも正視する勇氣がなくてはならない。併したとへ道德的偏見を捨て、も、彼の人格的生命が健全である限り、また強烈に働く限り、人格の内奥から出る價値感情は總ての經驗に際して活潑に働く。従つて彼は醜惡な所行を喜ぶ人物と同じやうに自らそれを喜ぶ事は出来ない。彼は醜惡な所行を憎む。その人物を憐れむ。彼の對象への没入が深ければ深いほど、憎惡と憐愍は高まるのである。

併しこゝでもまた人格如何が主要な問題である。我作家たちの多くは果して醜惡なる生活を眞に醜惡と感じ得るほど人格的生命の豊富と健全とを持つてゐるか。

例へば遊蕩文學の問題である。遊蕩生活を描くことそれ自身は悪くも善くもない。

たゞその生活の内容を取扱ふ態度によつて價值が定まるのである。所で所謂遊蕩文學者たちは遊蕩生活の美と醜とを、善と惡とをハツキリ見きはめてゐるか。私は遺憾ながら「然り」といふことが出来ない。私は彼らの生活に美しい情緒や親切な心情のある事を知つてゐる。併し彼等は「意志の病人」である、「精神の貧乏人」である、「人生の意義に對する盲人」である。一言にして云へば人格の不具者である。彼等は眞の醜惡を眞に醜惡と感ずる事が出来ない。同胞の魂を荒らすこと、同胞の心から生に對する愛と勇氣を奪ふこと、同胞の心に自己の頹廢を傳染せしむること、云々、及び自己の生命全體に對するあらゆる過怠、欺瞞、不正。これらに對して彼らは人格的に平氣である。従つて彼らは何が眞に善美であるかをも知らない。その結果はかういふ事になる、——彼らが或蕩兒を描く際には、その淫亂な所行の心理を十分に理解し同情してゐる。しかし彼ら自身も蕩兒と同じやうに、その所行の眞の意義を理解してはゐない。蕩兒の見るだけしか彼らも見ないのである。故に描か

れた蕩兒の人格的腐敗は即ち作品の腐敗である。——

併し私は知つてゐる、彼ら遊蕩文學者はそんな意味で作品の價值がなくても好いと云ふだらう。更にニヤ／＼笑ひながら、これでも澤山の讀者を慰め喜ばせてゐると云ふだらう。溝のなかで腐れかゝたウジ蟲！ 誰がこんな奴に藝術家の名を許したのだ。

（眞正なる藝術家よ。人間をより善き者にしようとして働く藝術家よ。人類の運命のために自己を高めようと骨折る藝術家よ。溝のなかの死鼠を珍らしさうに眺めてゐる群集に顧慮するな。腐れたものを見たがる者には君たちの藥はきかないのだ。）

悪いのは併し遊蕩文學者ばかりではない。藝術家と道義的生活とを離して考へてゐる（と云ふよりも生活の道義的意義に對して鈍感になつてゐる）總ての作家も同様に悪い。

材料を取扱ふ作家の態度に對しては、今行はれてゐるよりもつと／＼鋭い注意が拂はれなくてはならぬ。それが益々重大視され、作家の人格が益々問題となるに従つて、眞正な藝術家の仕事が追々その威力を發揮して來るだらう。

八

併し態度のいゝ人にも心理觀察眼が鈍過ぎるといふ事はあり得る。鋭かるべきものが鈍いといふ事は、いかなる場合にもいゝ事ではない。

或人々は正しい道を突き進んで行かうと努めながらその「自欺の傾向」と「對象への自己没入の不足」とによつて、「自己の價値を誇張して信じ他人の心を輕んじ過ぎるために、自己の生活を誤謬の淵に沈めて行く。彼は善き事をなすと信じつつ悪しきことをなすのである。眞實を書くと思つて嘘を書くのである。

明敏にして正確な自己省察の力は、第一に獲られなくてはならない。他人の心を如實に自己の内に生かし得る力も、それに即して獲られなくてはならない。（後者

の深さはたゞ前者の深さに伴ふものである。）

九

併し態度が好く、心理を見る眼が鋭くても、直ちに優れた藝術品を造り得るとは限らない、そこにはまた作者としての技術が必要である。藝術が或手段によつて作者の人格的生命を現はすものである限り、この制約を受くる事は止むを得ない。

尤も技巧の事に就てはこれまで氣にし過ぎる程氣にされてゐた。自然主義とか平面描寫とか主觀の燃焼とか云ふ事は、たゞ技巧に就ての議論に過ぎなかつた、と云ひ切つても不穩當ではあるまい。作家仲間であまいまづいと騒ぎ立てたのも、要するにこの範圍を出でなかつた。しかも遂に驚歎すべき技巧の生れなかつたのは何故であるか。それは本末を顛倒してゐたからである。内容の貧弱を棚に上げて形式にばかり拘泥してゐたからである。

最近には技巧に對する興味が割合に薄くなつた。と同時に彼らは材料の珍奇と挑

發的とを以て競争しようとしてゐる。依然として助からない。

併し技巧の重大なことは時勢によつて變る筈がない。技巧の作品に於けるは肉體の人間に於ける如く意味の深いものである。たゞ技巧は、内より押し出す内容があまりに豊富に横溢してゐる場合にのみ、眞に意義を持つものである事を忘れてはならない。

技巧の眞義は材料の統一である。整齊である。現はるべきリズムを純粹にし、テエマとなる旋律を支配的に響かせ、傍音をしてたゞ主音に奉仕せしめる、——これが技巧の眞髓である。その明かな例證はフロオベル、フランス、トルストイ、ストリンドベルグなどが示してゐる。

私は巨匠の作品を見る毎に、類型を彫り出す強い力を感じないではゐられない。彼らは最も個人的な形象を描きながら、しかもそこに普遍人間的な深い眞實を、——云はば「人間」そのもの、姿を、現出せしめ得るのである。この力が恐らくその

内容の横溢に打克つ唯一の武器であらう。彼らの巨腕はその力強い強調と單純化とによつて多くを示唆する核子、結び目のみを捕へて行く。かくて彼らは一冊の書の内に入生そのものをさへ描き得る。

もとよりこれは天才的な内生の豊富を前提とするものである。觀察の粗漏貧弱より生ずる類型的描寫と同日に論すべきものでない。しかし總ての作品はその技巧の目標をこゝに置かなくてはいけない。

この事は、内容の貧弱な作家の内にもその専門的苦勞によつて會得した人があるやうである。しかし内容の無價値は技巧の優秀を以てしても遂に救ふことが出來ない。

私は技巧に就ての配慮を、特に眞正な若い藝術家たちに勧めたい。彼らは内容の横溢のために冗漫に陥り勝ちである。私はその理由を知つてゐる。さうしてそれは意識してゐても中々直し難いものであることを知つてゐる。しかしとに角この冗漫

は打ち克たれなくてはならない。(既にこの冗漫に打ち克つた、讚嘆すべき二三の作家も我々の眼前に、若い作家の内に、ゐるのである。)

一〇

私は何と結論していゝか知らない。たゞ右の三つの視點より見て、これまでの日本に偉大な藝術が生れなかつた事は疑ふ餘地がない。近い内には餘程偉大なものが生れて來るだらう。きつと生れるに相違あるまい。それを祈る。

九 創作の心理に就て

一

我々は創作者として活らく時、その創作の心理を観察するだけの餘裕を持たない。我々はたゞ創作衝動を感じる。内心に萌え出た或形象が漸次醗酵し成長して行くことを感ずる。さうして我々はハッキリ掴み、明確に表現しようと努力する。そこにさまざまの困難があり、困難との戦がある。併し創作の心理的経路に就ては、何らの詳しい觀察もない。創作の心理は要するに一つの祕密である。

併し我々は「生きてゐる。」さうして總ての謎とその解決とは「生きてゐる」ことの内にひそんでゐる。我々は生を凝視することによつて恐らく知り難い祕密の啓示を恵まれる事もあるだらう。

昨夜私は急用のために茂つた松林の間の小徑を半ば馳けながら通つた。冷たい夜気が烈しく咽を刺戟する。一つの坂を下りきつた所で、私は息を切らして歩度を緩めた。前にはまたのぼるべきだら／＼坂がある。——この時突然私を捕へて私の心を急用から引き放すものがあつた。私は坂の上に見える深い空を眺めた。小徑を兩側から覆うてゐる松の姿を眺めた。何といふ微妙な光が總ての物を包んでゐることだらう。私は急に目覺めた心持であたりを見廻した。私の斜うしろには暗い枝の間から五日ばかりの月が幽かに併し鋭く光つてゐる。私の頭の上にはオライオン星座が、讚歌を唱ふ天使の群のやうに賑かに快活にまたたいてゐる。人間を思はせる燈火、物音、その他のものは何處にも見えない。併し總てが生きてゐる。靜寂の内に充ち互つた愛と力。私は動悸の高まるのを覺えた。私は嬉しさに思はず兩手を高く捧げた。讚嘆の語が私の口から迸り出た。坂の途中までのぼつた時には、私はこの喜びを愛する者に分ちたい欲望に強く攔まれてゐた。——

私は思ふ、要するにこれが創作の心理ではないのか。生きる事が即ち表現する事に終るのではないのか。

二

生きるとは活動することである。生を高めるとは活動を高める事である。従つて活動が高まると共に生の價值も高まる。人格價值といふのも畢竟この活動に外ほかならない。活動の高昇は即ち人格價值の高昇である。(もとよりこゝにいふ活動は外的活動の意味ではない。全存在的活動、あらゆる精神力肉體力の統一的活動である。)ところでこの活動は同時にまた自己表現の活動である。私の心が或人の不幸に同情して興奮する、私は急いでその不幸を取除くために駆け出す。私の心が自然の美に打たれて興奮する、私は喜びを現はささないではゐられない。即ち我々の生命活動は何らかの形で自己を表現することに他ほかならない。

我々が意志を持つ、さうして努力する。これ即ち自己表現の努力である。

我々が感情を持つ、さうして喜怒哀樂に動く。これも亦自己の表現である。藝術の創作は要するにこの自己表現の特殊の場合に過ぎない。

三

生命全體の活動が旺盛となり、人格價值が著しく高まつて來ると、そこにこの沸騰せる生命を永遠の形に於て表現しようとする衝動が伴ふ。あらゆる形象と心靈、官能と情緒、運動と思想、——總てが象徴としてこの表現のためには使役される。そこに藝術家特有の創作が始まるのである。

第一に高められたる生命がなくてはならぬ。生の充實、完全、強烈、——従つて人格價值の優秀……生の意義が實現せられ、人類の生活がそのあるべき方に、その目標の方に導かれて行く所の、白熱せる本然生活がなくてはならぬ。こゝに何物を犠牲にしても自己を表現しないではゐられない切迫した内的必然が伴つて來る。次にはこの深い精神内容をイキナリ象徴によつて表現し得る素質がなければならぬ。

象徴を捕へる異様な敏感、自己を内より押し出さうとする（戰慄を伴ふほどの）内的緊張、あらゆる物と心の奥に没入し得る強度の同情心、見たものを手の先から迸らせる魔術のやうな能力。——これが藝術創作に於ける最も特殊な點である。（ここに恐らく天分の意義がある。人がこの方法によつて自己を表現しなければならぬのは、その性格にひそむ宿命に強ひられるのである。）

併し所謂創作が必ず右の様なものであるかといふ事になると、私は躓く。我々の眼の前には、さうでないらしく思はれる創作の方が多いのである。第一、本當に生きようとしてゐないノンキな似而非藝術家が創作をやつてゐる。それを「本當に生き」たくない讀者が喜んで讀む。そこに彼らの仕事が何らか社會的の意義を持つやうな外觀を呈してくるのである。で彼らは乘氣になつて、自分が或事を云ひたいからではなく讀者が或事を聞きたがつてゐる故に、その事を面白おかしく喋り散らす。純然たる幫間である。また或人はたゞ創作のためにのみ創作する。彼らの内に

は、生を高めようとする熱欲も、高まつた生の沸騰も、力の横溢も何にもなく、ただ創作しようとする欲望と熱心だけがある。内部の充溢を投與しようとするのでなく、たゞ投與といふ行爲だけに執著してゐるのである。従つて彼らの表現欲は内生が沈滞し平凡を極めてゐるに比べて、滑稽なほど不釣合に烈しい。

表現を迫る内生とその表現の方法との間にかくの如き虚偽や不釣合があり得るとすれば、私が藝術創作に就て云つた事は一般には通じない事になる。即ち我々は所謂創作と呼ばれるものの内に、眞の創作と偽の創作とを區別しなければならぬ。さうしてたゞ正直な高貴な創作をのみ眞の創作として取扱はなければならぬ。この貴族主義的な考へ方は近代の心理學的方法とは背馳するが、併し創作の事に就ては實際止むを得ないのである。

然らば何によつて創作の眞偽、貴賤、正直、不正直を分つか。生きる事が自己を表現することであり、その表現が創作であるならば、いかなる創作も虚偽であり卑

賤であるとは云へない筈ではないか。

それはたゞ表現を迫る生命とその表現方法との關係に於て、(その關係の正不正に於て)見る他はない。人間には感心しない物を感じたらしく詠嘆する能力がある。少しく感心したものをひどく感心したらしく云ひ現はす能力もある。人によれば自分の感じたことをわざと抹殺しようとする習慣をさへ持つて居る。或は殆んど無意識に自分の感じた事の真相から眼をそむける人もある。これらの事實は表現の虚偽を惹起さないでは止まない。

表現を迫る内生はそれにピッタリと合ふ表現方法を持つてゐる。この關係を最も適切に云ひ現はすため、私は曾て創作の心理を妊娠と産出とに喩へたことがある。實際生命によつて生まれたもののみが生きて産れるのである。我々は創作に際して手細工に土人形をこさへるやうな自由を持つてゐない。我々は寧ろ生まれたものに驅使されその要求する所に無條件に服従する他ないのである。

特に藝術の如き複雑困難な表現手段を必然的に必要とする内生は、非常に高められたものであると共にまた極めて繊細なものである。その表現に際して虚偽を絶対に避けるためには、生まれたものに對する極度の誠實と愛と配慮とがなくてはならぬ。——もと／＼妊まない者が、即ち高い深い内生を、生命の沸騰を、持つてゐない者がそれを持つてゐる者の如く振舞ひ表現しようとする如きは、頭から問題にならない。併し何事かを妊んだ者が、たゞその産出の手際と反響とのみに氣をとられて、生まれた物に對する正直と愛とを忽せにする事は、極めて陥り易い邪路として嚴密に警戒されなければならぬ。たゞ正直に、必然に従つて、愛の力で産む、——そこにのみ眞の創作があるのである。

更にまた藝術の創作については、大いなる者を妊むことが重大である。即ち自己の生命をより高くより深く築いて行くことが、創作の價値をより高からしめるためには必須の條件である。人は偉大な作品を創^{つく}りたいといふ氣を極めて起し易い。併

し偉大な表現はたゞ偉大な内生あつて初めて可能になるのである。何を創作したいといふ事よりも、先づいかに生きたいといふ欲望が起らなくてはならない。人は第一に生きてゐる。表現はその外形である。我々のなすべき第一の事は、決然として生の充實、完全、美の内に生きて行かうとする努力である。

四

我々はもういくらかの人生を見て來た、意欲して來た、戰つて來た。その體驗は今我々の現在の人格の内に渦巻き或は交響してゐる。我々の眼や我々の意欲は、このオーケストラを伴奏として更に燃え、更に躍動しようとする。さうしてこの心は自らを表現しないでは止まない。たとへ我々の生命の沸騰が力弱く憐れなものであるにしても、我々はなほ投與すべき力の横溢を感じる。我々は不斷に流れ行く自己の生命を結晶せしめ、我々の脆い生命に永遠の根を下ろさなくてはならぬ。併し我は更に昇るべき衝動を感じる。我々は更に見、更に意欲し、更に戰はねばならぬ。

我々の表現すべき内生は眞理の底に、生命の底に、まつしぐらに突進して行く奔流の如き情熱である。岩壁に突き當つて跳ね返へされる痛苦を、齒を喰ひしばつて忍耐する勇氣である。我々の血は小さい心臓の内に沸き返つてゐる。我々の筋肉は痛苦の刺戟によつて緊張を増す。この昇騰の努力を表現しようとする情熱こそは、我が人類に對する愛の最も大きい仕事である。

一〇 聖者と藝術家

一

今の社會で働いてゐる人は感じたり思つたりしたことをそのまま、無遠慮に出さない場合が多い。例へば自分の上役が愚劣な人間だと思つても、あなたは愚劣だとは云はない。社長が無能だと思つてもその前へ出てあなたは無能だと云ふ男はない。いくら腹が立つても黙つて辛抱してゐるか、せい／＼蔭でこつそりコボす位なものである。もつと「世慣れた」人になると自分の感じとはまるで反對なお世辭を恰も自分が内々感じたことの償ひであるかのやうにベラ／＼喋舌る。さうしないと立身が出来ない。或は地位が危うくなる。——上に立つ人の方でも、人の使ひ方をうまくするためには、自分の感情を露骨に出すやうなことはしない。かうして互に自己

を引こめて置けば、人と人の間が圓滑に行く。

尤も人によつては、かういふ辛抱をさほど苦痛に感じないほど無感情になつてゐる。さういふ人には「人らしい」感じがない。また他人に對して殆んど不快な感じを抱かない人もある。他人がどんなイヤな事悪い事をしてゐても、無理はないと思つてゐる。それは魂からの奴隷である。今の社會に働いてゐて不快を感じたり苦痛を感じたりしない人は、生きてゐるとは云へない。――

假面を被る苦痛をなくするために、人を使つたり人に使はれたりする生活から出来るだけ遠のかうとする人々がある。例へば上官に思ふことが云へない苦しさを脱入れるために、官吏をやめて新聞記者になり、大臣たちを頭から叱りつける自由を手に入れる。しかし新聞社の組織は甚だしく個人を束縛する。そこでもつと自由に物をいふために、一人になつて論文を書く、或は雑誌を經營する。しかし言論の自由などといふことは日本ではほんの少ししかない。思つたことは半分も云へない。そ

れでも強ひて感ずる通りを云へば牢屋へはいらなければならぬ。結局社會に對しては全然無遠慮になるといふことは出来ない。

その方は辛抱することとして、次は個人同志の間の接觸である。世間にはいろいろイヤな奴がある。見てゐられないやうなことを得意になつてやつてゐるのなどを見れば、イキナリなぐりつけたくなる。一度や二度はなぐりつけて見る。しかしさうしたところで、一時自分の溜飲が下るだけで、相手はどうにもならない。寧ろあとに面倒臭い事情が残る。氣まづい思ひもしなくてはならぬ。寧ろ疝癢を押へてゐた方がいゝといふ事になる。――また別にイヤな人間でなくても、何の氣なしに感ずるまゝを云つてその傷に觸れ不愉快な思ひをさせることがある。相手にイヤな思ひをさせたくはないから、出来るだけ傷には觸れないやうに用心しなくてはならぬ。またたとへイヤな思ひをさせてもそれは云つた方がいゝと思ふ場合もある。しかし云ふ以上はイヤな思ひをさせた責任を十分自分に負ひきれ程の愛がなくてははいけ

ない。冷淡ですませる人には云はない方がいゝ。もし是等の場合にも遠慮なく感ずる儘に云つてゐれば、四方八方に對して衝突が起るばかりである。

もとより無遠慮にふるまへる人は、人を喜ばせ得ることをも感ずるまゝに無遠慮に云へる。その開け放しな性質が相手に解つてゐれば、どんなことを云つても相手が怒らなくなるといふ場合もあるであらう。しかしいろんな事を心得てゐる大人は決して子供のやうな本當の無邪氣さを持つてゐるものではない。その氣質や性格によつて一見非常に無邪氣な態度で人に接することの出来る人もあるが、さういふ人は本能的な早さで云ふべきことを取捨してゐるか、でなければ人の心持をいたはる同情心が非常に發達してゐて絶えず相手に愛を注ぎかけてゐるのである。本當に無遠慮な人は必ず粗野で、いつか人を怒らせてしまふ。もしさういふ人が衝突しないであるとするれば、それは相手から少し足りない人間として見下されてゐるからである。

しかし愛がある場合には非常に違ふ。愛は敏感で互の心を隅々までも感じさせる。いかに無遠慮に感ずる儘を云つても、其の言葉に愛がにじみ出てゐれば、相手は決して本當に怒りはしない。元々愛するものに對して感ずることは、いかにそれが相手の弱點であつても、同情が行き互つてゐる。もし相手を責めるとすればそれは自分を責めると同じ心持である。相手を苦しめるとすれば自分も同じに苦しむのである。この世界に至れば、初めて人は感ずるまゝ、思ふ儘に自分を現はし得る自由を獲得する。假面をとつた自由な心持を求むる者は結局この世界まで退却しなくてはならない。後に残る問題はたゞこの世界の廣狹である。

二

しかしこの様な純粹な愛を誰でもが實現してゐるであらうか。

人はその最も近いものとして親子兄弟及び友人を持つてゐる。さうして普通の場合にはそこに愛が存在する。けれどもその愛の内にとれほどかエゴイズムがはいつ

てゐない場合は稀である。例へば親が子を愛するには本能的な強さを以てするが、しかしその愛は大抵子を自分の型に入れようとする我儘で濁らされてゐる。さういふ親は子の心の開展を見まもる代りに自分の或空想を子の將來にあてはめて置くのである。それで子がその埒内にゐないことに氣附くと、子の將來の幸福が悉く崩れかゝつたやうに心配して、再び子を自分の空想の埒内に押し込めるために、苦しんだり怒つたりする。或場合には子の運命に對する心配よりも自分自身の感情（例へば自分の親としての權威が傷けられたとか自分が世間に對して恥かしい思ひをしなければならぬとか自分の空想がこはれて失望したとかいふことから起る苦しみ）の方が、一層強く活はたらいてゐる。これらの場合には愛はもう活潑にその力を發揮することが出来ない。もつとひどいのは、美しい子を醜い子よりも、ハッキリ區別のつくほど濃く、愛する親である。自分が責任の一半を負はなければならない宿命的な事實に基いて我儘な愛し方をするなどは、寧ろ残酷といふべきである。この種の濁

つた愛は子が親に對する時にも、また兄弟や朋友の間にも同じやうに認められる。かういふ愛の世界に於ては勿論人は思ふまゝに振舞ふ自由を持つてゐない。思ふまゝに振舞へばエゴイズムスが盛んに出て互に衝突するばかりである。しかし人々は愛があると自信してゐるために、或は衝突の少なかつたい、過去を持つてゐるために、エゴイズムスの出ることに氣附かないで自由に振舞ふ。さうしてさま／＼の不愉快な葛藤を引き起す。自欺と虚偽の嫌ひな人々も事を起す點に於ては自欺と虚偽に沈湎してゐる人々と變らない。自分が非常に悪いと信じてゐる事を善いと云ひ、また事實とまるで相反な嘘を眞しやかに話せば、死の床にゐる人がその最後の短かい時日を幸福に送れると解つてゐても、虚偽の嫌ひな人にはそれは中々出来ない。黙つてゐるのがせい／＼關の山である。彼はどうかして死んで行く人の迷執を救ひたいと思ひ、かうして死ぬこと不幸に心から同情する。しかし彼の愛は誤謬に對する非難によつて濁らされてゐる。彼はその信念を操守するために、知らず／＼瀕

死の人を苦しめることになる。そこでこれ迄永い間純粹でなかつたお互の愛の最後の悲劇が起る。——我々は愛をのんきに考へてはいけない。愛は純化せらるべきものである。本能的に存在はするが、鑛石のなかの金屬と同じで、鎔爐にかけられなければそれ自身に存在するものとはならない。さうしてこの純化が我々の生活の重大なる任務である。

愛の純化が出来る度に従つて我々は自由を獲得する。

三

愛は屈従ではない。

エゴイズムを自ら押へる時に人は屈辱を感じる。それは他人を立て、自分を卑しくする様に思へるからである。しかし自分が犠牲にしたのは自己心奥の要求ではなくて肉體の快樂安逸或は虚榮心の類に過ぎなかつた。些かも自己の人格を卑しくしてはゐない。この關係をハッキリさせれば愛が屈従ではなくして自己征服であり、

同時にまた他を同化する所以である事が、しみと心にしみ込むであらう。自己の碎かれた心を喜ぶ心持には、人と人との間の障壁のとり除かれた爽快な新世界の豫感が強く渦巻いてゐるのである。

愛を得たがために自己が束縛せられたかの如く感ずる者は、實にエゴイズムの束縛を感じつゝあるに過ぎぬ。愛を強め、自己征服を完全にする時に、束縛は忽ち消えて行くであらう。

四

總て人は他人に於て自分を見る。他人といふのはつまり自分の客觀的な姿である。他人がイヤに見えるのは、自分の内にそれだけイヤなもの存在してゐる證據である。卑屈な心理を持つてゐる人は誰の行爲をでもその心理で解釋する。虚榮心の強い人は他人を皆虚榮心の權化と見る。肉欲的な人は人生全體を肉欲の所生と見る。それに反して無邪氣な子供は、大人の心理の大部分に附氣かないでゐる。

だから皮肉の眼で他人のアラ探しをするやうな人は、その人自身がさういふイヤな性質を多分に持つてゐるのである。人間の淺ましい性質の鋭い觀察者は、自らさういふ淺ましい性質の持主である。

併しいくら悪いものを多く持つてゐても、それと共に又いゝものをも多く持つてゐれば、同じ様に他人の内にいゝものを見出す。他人がイヤに見えると共に、又其底に非常に同情すべきものが感ぜられる。例へば嘘つきのみえ坊の心理が見えすくと同時に、其の男を僻ませた暗い運命や、虚勢を張らないではゐられない心の苦しみなどが沁々と解る。どんな醜惡な行爲の裏にも何かしら人間らしいものが見出せる。

かうなると人間の害悪や野卑を鋭く見きはめるといふことは、それだけでは自分の恥の證明である。それ以上に人間の善良や尊貴が見きはめられる時、初めてこの恥はなくなるのである。併し人間の害悪や野卑が見えないといふ事は自慢にはなら

ない。子供に於てはそれは心の單純である。大人に於てはそれは心の貧弱である。悪行を見てその悪さの解らないものは、やがて悪をにくむ能力のないものであらう。やがてまた善を實現する能力のないものであらう。基督や佛陀が特に鋭い惡の指摘者であつた事は、忘れてはならぬ。或意味から云へば、此二人の超人は人間の害悪や野卑が氣になつて堪らない所から生れたのである。彼らの内には特に多くの害悪や野卑が住んでゐた。しかし彼らの内に善良や尊貴は、それを征服しつくすまで火の様に燃えた。愛はこの征服の一步々々と共に高まつた。さうして遂に無量の域に達した。彼らは絶対に自由となつた。しかし彼らは害悪を見なくなつたのではない。彼らはその敏感な同情によつて人間の心を如實に知る事が出来る。さうしてあらゆる人間の苦しみを自分の苦しみと同じく苦しむ。そこで自分の内に起つた害悪の征服をまた人間全體の上に起らせねばならぬ。……

いくら愛が大きくなつても人間が皆其儘に完全な善人に見えるわけではない。も

しさうなら佛陀も基督も生れなかつたであらう。愛の擴大は惡人をも愛するに至らしめるが、併し「惡」に對しては益、鋭く憎惡をつのらせるだらう。

五

愛の世界が狭いことは即ち生活が小さいことである。世間がイヤだからと云つて自分の世界を小さく限るのは、愛の不足から出た止むを得ない現象ではあるが、しかし何人もそこに安んじてはならない。愛は強めなくてはならぬ。愛の世界は擴げなくてはならぬ。

愛が極度に強まつて、いかなる人間をも抱擁し得るやうになつた者こそ、聖者と呼ばれるべき人間の頂上である。彼に於ては自由でない場所はない。どこに行つても思ふまゝ、感ずるまゝ、を無遠慮に出す。總ての人が自分である。その惡もその苦しみも總て自分の心である。もとより世間には彼の愛に動かされないものもあるが、彼はさういふものの罪をさへも自分に擔はうとする。彼は憤る、彼は罵る、さうし

て十字架につくことを辭せない。かくて人生全體が彼自身の生活になる。個人でありながら彼は人類そのものである。

我々の生活の標的はそこになくなくてはならぬ。たとへそれが我々の現在の生活から非常に距つてゐようとも、標的として目指すことは閑却せられてはならぬ。

六

藝術家は聖者ではない。彼も亦聖者を標的として遙かな道を歩まなければならぬ一人の人間である。感じたり思つたりした事をその儘に出せない人間の一人である。しかし彼は、その實生活に於ていかに愛が狭く不自由であらうとも、その創造する所の世界に於ては自己全體を無遠慮に出し得なくてはならぬ。そのためには聖者と同じく自由であり同じく博大な愛を持たなくてはならぬ。もとよりこの世界は彼自身の實生活よりは遙かに廣く、また彼の實生活に於ける愛が擴まるに従つて益々擴大するものであるが、しかしいかなる場合にも彼は、彼が聖者の如くに愛す

ることの出来ないものを、その創造の世界の内に持つてゐてはならぬ。

藝術家は豊富な生活の所有者である。彼の内には普通人に於けるよりも遙かに多くの人間が住んでゐる。従つて彼は普通人以上に多くの心理を経験することが出来る。併し彼は必ずしも其内の善きものを以て悪しき者を征服して了つた状態になることもいゝ。愛を以てエゴイズムを焼き盡した人でなくともかまはない。そこに不斷の争や迷が普通の人間と同じく存在し、同じく苦痛が心臓を噛み破つてゐるといふやうな人であつてかまはない。従つて社會のイヤな人間を全然愛なしに憎み、イヤな心理を全然嘲笑的に見てゐても一向差支へはない。たゞ自分の愛をより大きくしようといふ要求さへあれば、其實現の程度が低く、其實生活が争や不和や衝突に充ちてゐても、彼の藝術家たる事を妨げはしない。彼に於て重大なのは實現の程度ではなくて實現の苦勞から得た様々の體驗である。それによつて彼は彼自身の世界を造り得るのである。

だから藝術家は小さい道德家になるよりも大きい迷ひの人であつた方がいゝ。小さい善をするよりも豊かな體驗を持つた方がいゝ。併し藝術家がたとへ自分の創造した世界だけの事とは云つても、とに角聖者にならなくてはならないためには、強い愛と烈しい向上の要求とを缺くわけに行かない。自分の創造した人物がどんな悪い事をして、その底に愛すべき「人間」のひそんでゐる事を認めて、「惡」を憎むと共にその「人間」に同情の涙をそゝぎ得るほど大きい愛を持たなくては藝術家ではない。自分の創造した世界で無遠慮に思ふまゝの事を云つても少しも不調和が起らないほど自由な心境を獲てゐなければ、藝術家ではない。是等の愛や自由な心持は、いゝ加減な扮飾や誇張によつて作物の上に出せるものでは決してない。それは結局作者の人格にかゝるのである。

藝術の氣品は、作者が其創造した世界で聖者になることによつてのみ、にじみ出て來るものである。

一一 苦言

「どうせ僕のやうな才能のない平凡な人間は、——」と君は云ふ。しかしその言葉はすなほに響かない。君は反感から、嫉妬から、それを云ふのだ。自分は平凡でありたくない。平凡であることは堪らない。しかし自分が非凡だといふ確證はどこにもない。自分はAの如き才能も、Bの如き技巧も持つては居らぬ。自分のするとは何人の嘆賞にも値しない。是は口惜しく、苛立たしく、又つらい事だ。けれども——此のけれども、君の言葉の重心がある、——けれどもAやBにした所でどれだけ非凡な偉さがあるのだ。あんな小いつぼけな才能とあんなにコセ／＼した關心とは、非凡人の名には値しない。寄席藝人の藝と何の擇ぶ所もないではないか。他

の人に同じ事が出来ないといふだけでは、非凡とは云へない。結局我々と五十歩百歩だ。非凡人などといふものが、さうザラにある譯でない。——かういふ感情が君の言葉から響いて来る。かうして君は、自分の不安を拂ひのけようとしてゐるのだらう。

本當に自分の小さい事を悟つた人は、恐らく君のやうな言葉は口にしまい。彼の謙讓な心には、自然と人生とのさまざまの偉大が、溢れる様に流れ込んで行くのだ。彼は偉大なものの偉大さを最も深く體驗する。さうしてその偉大の内に自分を没入しようとする。自己の凡非凡の問題はもはや彼の心を曇らさない。自分の前に非凡なものを見ることは、彼にとつては幸福である。従つて彼は、自分の前の小さい才能や小さい非凡人が、早くから老衰して了ふことなしに、大きい才能、大きい非凡人に成長して行くことを心から祈る。——このやうな人は、いかに彼自身が自己の凡小を悟つてゐようとも、既にその悟りの故に非凡である。さうしてまた大きい仕

事を成就しないとは限らない。謙虚な心から貴い仕事の生れた例は、特に愛の宣傳者などの内には、澤山あるではないか。

君はあの言葉を使った心持をもつと反省して見なくてはいけない。自分の凡小を悟る事はそれ自身には決して悪くはないが、唯それを反語として使ふ様な心持が宜しくないと思ふ。あゝ、いふ響を持つた言葉は又悪臭をも伴つてゐるから、聞く者には堪へ難い厭嫌を催はさせる。けれども僕はその臭氣が君の内臓から出て來るのでないことを信じてゐる。さうして君がそれに氣附けば、容易に癒し得るだらうといふことをも信じてゐる。

二

また君は、「先が見えてゐる。どうせ自分は大した仕事も出來ないに極まつてゐる、」と云つた。しかし君は自己の運命に就て、どうしてさうやすくと豫言することが出來るのだ。勿論君は、自分の現在の才能や力の感じから押して未來を算出

して見たのだらう。けれども君がAやBのやうな才能を持つてゐないといふことは、どうして君が才能を持つてゐないといふ證據になるのだ。君は君の知つてゐるどの人にもない様な君獨特の才能を持つてゐるかも知れないではないか。君は成程試みて見た。しかしそれはAやBと同じやうなことが出來るかどうかを試みたに過ぎぬのだ。さういふ試みをいくら重ねても、君獨特のものが出て來るとは限らない。君はたゞ自己を培ひ自己を成長させることによつて、君獨特のものの發芽するのを待たねばならぬ。そんな種は自分の内にはない、培つても駄目だ、とは誰が斷言し得るだらう。君はまだその種が發芽するやうに面倒を見てやらなかつたのだ。さうして芽が出て來なければ、君は自分の内にその種があるかどうかを見きはめる事が出來ないのだ。それほど自分に對して盲目でありながら、どうして自分の未來を豫言することが出來るのか。今までこれほど永い間培つてもまだ芽を出さないところを見ると、どうやら種はないらしい、と君は云ふかも知れない、しかし君は、こんな種

があるだらう、あんな種があるだらうと、人を見てはしくなつたものを自分の内にも見つけ出さうとして、さういふ目的に合つた肥料をしか自分にやらなかつたらう。しかもそれが僕から見ると至極貧弱だつた。さういふ事をして置いたくせに、もう手ぬかりなくやつたといふ様な顔をしてゐるのは、自己に對して僭越過ぎる。自己の内の獨特な種を育てたいといふ意欲が弱いのだとしか思へない。君がもし自分の内に強い力を感ずることが少ないとすれば、それもこの意欲の弱さから來るのであるかも知れぬ。勿論人間は、どんなに強い人でも時々弱るものだ。さうして憂愁の底に沈んで自分の力の足りなさに嘆くものだ。君にその事のあるのは少しも君に力がないといふ事にはならない。しかも君はその反對に溢れるやうな力を自分の内に感じたことが曾てないとは言へない筈だ。たゞさういふ機會が自分の願ふほど多くないといふだけだらう。それならば君の意欲が強まるに従つて力を感ずる機會が多くなることも疑はない。君はたゞ意欲すればいゝのだ、さうしていゝ種の芽生

えて來る事を信すればいゝのだ。僭越な早合點を土臺にして、數學的に算出でもしたやうに、自己の未來を豫斷するなどは以ての他の事だ。此様な豫斷をさも確かな事らしく信じてゐるといふのも寧ろ滑稽に類する。

君は自分の過去を省みて、重大な出來事が皆豫期以外のものであつた事を認めないか。運命の進程が、多くは自分の頭の算出した所と異つてゐた事を認めないか。頭で豫想した未來といふものは、實は過去を未來迄引きのばしたものに過ぎぬ。眞實の未來の認識ではない。元來未來の事は認識される筈のものでない。

君は唯未來を意欲すべきだ。願望すべきだ。さうして信すべきだ。元より信ずるのであるから、それが合理的根據を持つことは必ずしも必要でない。未來にいゝ種の芽生えを豫期するのが、今の君に不合理に感ぜられるといふ事は解つてゐる。併し君がそれを意欲するならば、信じないではゐられぬ筈だ。唯頭で考へると不合理だからこそ信じるのだ。君は自分が大した仕事も出來まいといふ豫想を反つて合理

的だと思つてゐる。併し其合理的がどういふものかは、僕の指示した通りだ。其合理的は後の場合の不合理的より毛程も優つてはゐない。僕は君が自己を信ずる事を心から祈る。此信仰がないために、どれ程多くの人が萎縮し滅亡して行くことだらう。君がもし同じ運命に出逢ひたくないならば、自己を愛するがいゝ、愛するが故に信ずるがいゝ。これこそ自己に對する最上の善だ。

三

君はまた書きたい要求のことを云つた。これほど自己に失望してゐながらも、書かないで暮らすのは苦痛だと云つた。僕はそれを無理とは思はない。自己を表現しようとする欲は人間の本能にあることだ。しかしこの書きたいといふ氣持にも不純なものも混じてゐることを見脱してはいけない。我々は、書かれることを欲してゐる或者が我々の心の内部から我々に表現を迫る場合だけに、書きたくなるのではない。時には何者も内部から迫つて來ない時にも書きたくなる。何を書かうかと材料

を探すやうな氣持でゐながら、書きたい要求だけは熾烈に燃えてゐる。妊んでゐないものが、産むべき子を胎に宿してゐないものが、たゞ産みたくなると同様である。それが本當に産氣づいたのではないことは云ふまでもあるまい。では何故産みたくなくなるか。——それは第一には胎みたい要求の變形であるが、又外からの刺戟からも起る。例へば君はAの製作を見る。さうして自分もあゝいふものを造りたいと思ふ。或はBの評判を聞いて、自分もあゝいふ評判を得たいと思ふ。さういふ事が自分に絶對にないと、君は斷言することが出来るか。出來まい。この場合の書きたい要求は君の内奥から出たものではない。僕はそれに同情することは出來ない。もし君がかういふ要求のために苦しみ焦立つてゐるのなら、僕はその苦しみや焦燥から決していゝものが生れないことを斷言する。勿論この種の要求からでも人目につくやうな製作をした人はない譯ではない。しかしそれは手先の器用な、眞似のうまい、機智に富んだ人のことだ。君はそんな素質を一つも持つてはゐない。君はこの點で

嚴密に自己を警戒しなくてはならぬ。

藝術製作は唯職業として選ばれるべきものでない。藝術を味はふ事が好きだからと云つて、直ちに藝術製作を一生の仕事とするのは危険だ。藝術家は素質にある、本能にある。自己を表現しようとする欲望が、真に自己の内奥から出てゐるかどうか、それをまづ君は明瞭に見極めなくてはいけない。藝術家の生活のわりに華やかな外形に誘惑せられて、熱に浮かされた様にウカ／＼と足を踏み込んで行く様では、到底深く突込んで行ける望がない。それでもいゝ、唯文學者といふ名のつく者にさへなればいゝのだ、といふのならそれは別問題だ。しかし自己を最もよく活かせる爲めに心を苦しめてゐるのなら、好く考へて見なくてはいけない。文學者となる事はばかりが生活の意義ではない。何よりも先づ自己を活かし切らなくてはならぬ。自己を高めなくてはならぬ。さうして自己の完成に近づかなくてはならぬ。いかなる仕事を選ぶも、要するに此目的の實現の爲めの手段に過ぎない。藝術家たるよりも

先づ「人」たる事が重要である。僕は君が此點に就て十分腹をきめてかゝる事を希望する。文學者になれなければ生きがひがないといふ様な感傷的な心持は、町の小娘が藝者になれなければ生きがひがないといふのと何等擇ぶ所がない。是は云ひ過ぎだらうか。僕はさうは思はない。現に或種の文學者は、藝者と同じく媚と恥とを賣つて生活してゐるではないか。

君は恐らく小さい狭い世界へ引つ込み過ぎてゐるのだ。眼を舉げてひろい人生の水平線を見渡したまへ。さうして人間が何であるか。人生が何であるかを、その眼で直接に見きはめたまへ。

四

人生と自然とは君の眼前にある。君はそこから學ぶべきだ。自分の眼を以て、自分の心臓を以て。

僕が君の言葉から最も強く不愉快を感じたのは、君が他人の眼と心とを以て物を